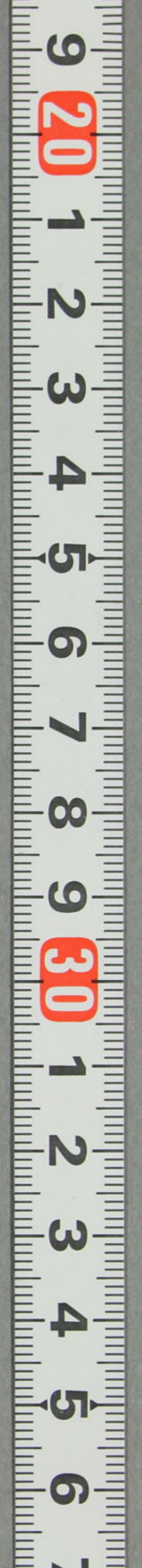


繪入諸佛  
 季子寄手引草  
 卷

^ 5  
 4673





細鱗舎松江関  
一事菴史彙編

版權所有

繪入  
俳諧

# 季寄手引草

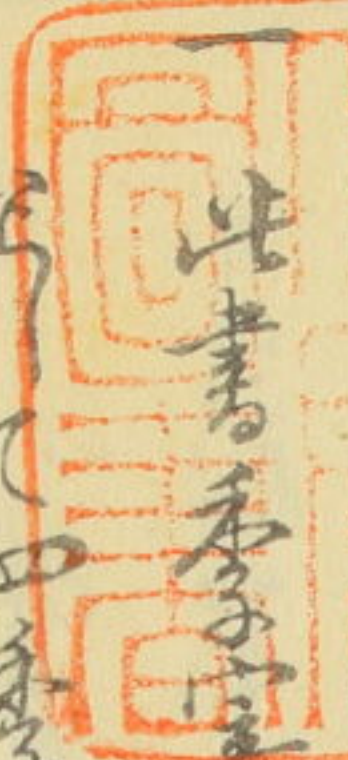
全二冊

東京書肆

弘文館藏版

俳諧季寄手引草

凡例



此書季寄は古陽曆に依て二月より四月までを春  
として四季小分ち神祇の祭典公事故事及節會  
禮式等の太陽曆に改まりて後と大小異同あり陽  
曆に用ひて祭典を行ふ地もあり舊のまゝ陰曆を  
用ゆる所もあり本た區々して一定せし其地は統  
して一にたゞざれを記し多く故不詳  
釋の典典の舊の中に出す又近年節會は  
至りては今ハたゞて申喜まこと多々あり私  
取捨せばとすまゝに従来の通るに準じたり又題

昭和十六年一月十一日  
尼野貴英氏贈

凡例











明日やもてよれ上た松乃乾  
 元日やもてよれ上た物より  
 本枯れおこも落しぬ時を  
 飛んよまよの春れやと暮  
 探杆よもよもや暮の乾法沙  
 灌佛や目出度まよ中よま  
 生よりの垣乃結めやし初志  
 友よ時乃よまよ安まよや  
 夕よのよ何よまよあまよ  
 朝よのよまよのよ花のよ

角 角  
 空 空  
 末 末  
 草 草  
 六 六  
 考 考  
 坡 坡  
 人 人  
 枝 枝  
 風 風

俳諧 季寄手引艸目次

上之卷

○季寄

歳旦之部

春の部

夏の部

○頭書

俳諧心得草

附合指要

附合心得

案方七名

附句八體

初 丁

五 丁

廿三 丁

初 丁

十三 丁

十六 丁

廿二 丁



見定 三十丁  
 動附 卅一丁  
 附裁 卅三丁  
 附句體用 卅四丁  
 死活 卅五丁  
 自他 卅六丁  
 句作 卅七丁  
 俳諧の式 四十二丁  
 去嫌句數 四十五丁  
 去嫌 四十七丁  
 神祇の詞 四十八丁  
 釋教の詞 五十丁

無常の詞

下之卷

○季寄

秋の部 初丁

冬の部 卅二丁

○頭書

述懐並懐舊の詞 初丁

人倫の詞 二丁

居所の詞 四丁

夜分の詞 六丁

山類の詞 七丁

水邊の詞 八丁

五十二丁

初丁

卅二丁

初丁

二丁

四丁

六丁

七丁

八丁



戀の詞	十丁
季に成らざり詞附雜花	十八丁
月花の詞	十九丁
發句切字	廿一丁
切字作例	廿四丁
發句卅體	卅二丁
諸部發句	卅五丁
芭蕉翁四季發句	四十一丁
故人四季發句	四十三丁
目次終	

繪入俳諧 季寄手引草卷之上

一事庵史栞 編  
細鱗舎松江校閱

俳諧心得抄

○附合指要

○芭蕉翁の云俳諧ハ  
上手み嘘をくらぐもの  
ナリ  
支考の云まひみお  
ろくみハ俳諧の風骨  
ナリ

○歳旦之部

一月	一日	元日	元朝	元旦	雑旦
	履端元三	元朝	元旦	雑旦	雑旦
改年	改年	改年	改年	改年	改年
三ツ此朝	日の始	初日影	年の初	年初年	年初年
あら玉の年	の月	新年	むふ年	若き年	若き年

附合指要

一月 歳旦

一



去来云蕉門の附句ハ  
前句の情を引來る  
を嫌ふ多し前句を  
いふは人とその業を  
乃位を能く見定て  
前句をばつき證し  
て付合し但し前句  
への冬より句ひと雨  
との移り何きの心  
みたり付んやこそ  
句作の上を情を  
引まはあささるる

年立	明る	年立	年立	年立	年立	年立	年立	年立	年立	
四方拜	朝拜	朝賀	腹赤誓	氷の様	國栖奏	祇園削掛	年神	初雞	年玉	初夢
一日の朝 天皇天地四方を拜し	朝賀より以下何きも百官天皇へ拜礼	氷を朝庭へ奉る	氷厚きときハ豊年	和州吉野の人民朝庭不出て歌をう	一日寅の刻神事を行ふ	年棚門の神棚	初明	初空	初鳥	初曆
年立	年の花	朝賀奏賀	築紫より鱒の魚を	年德神	年禮	初曆	初空	初鳥	初曆	寶船

○故人云歌河運活の  
優言ハ風情を盡  
はとハツハ心趣向ハ  
そまじとくは心は  
俳諧を笑ふへは  
久々。あつとを  
上家版上の道遙ハ  
して夏ハ土農工商  
の輩何中の風雅ハ  
遊ぶを多し俗談  
平話を考とすべし  
と也

餅	門飾	門松	飾竹	飾	福藁	標葉	掛鯛	若餅	鏡餅	齒固
敷ハ二日ニ賣ハ臘ニ餅などを煮焼してくらふを故事ニ	大ウガウガ。あざ縄。伊勢海老。あざら	松の内に立松	庭みわらを志きて物を喰ふたり	庭みわらを志きて物を喰ふたり	庭みわらを志きて物を喰ふたり	親子艸	一日ハ鯛一雙をこら縄を以てのむを結ハした標葉をこらみて竈のくくけりける	故齒の字をよそいと訓ハ	とて向ふ人ハ齒を以	とらふ心なり齒固の具ハおき六本ハ押船大根、橋
若夷	庭竈	年男	若水	井開き	注連飾	齒朶	若餅	鏡餅	齒固	一月 歳旦 冬

一月 歳旦 冬







ももせ第三七か  
格を持つて一四句  
のそ平句の地ある  
まうまうと専と心得  
登一  
但し清小起義格合  
りつとめく目まきも  
その格も順すもい  
んう俳諧も曲節地の  
三法あつて一句も一巻  
少もは扱あつとちり  
たふハ昔句ハ曲して  
服ハ地の句ハ第三ハ一節  
あつて昔句ハあつて平句

傀儡師 <small>くわいじん</small>	撰州西の宮より出る	毬打 <small>きうち</small>	玉打
ぶりく	懸想文 <small>けさうぶん</small>	福引 <small>ふくいん</small>	寶引
謡初舞初	彈初 <small>ひま</small>	松 <small>まつ</small>	雜書 <small>まじり</small>
吉書 <small>きちしょ</small>	華始 <small>けし</small>	手鞠 <small>てまり</small>	手 <small>て</small>
試筆 <small>しひつ</small>	初硯 <small>しつげん</small>	鞠 <small>まり</small>	手 <small>て</small>
羽子板 <small>うしこ</small>	羽子の子 <small>うしこのこ</small>	きそ初 <small>きそ</small>	節衣 <small>せうい</small>
おき板 <small>おき</small>	おきの子 <small>おきのこ</small>	初 <small>はつ</small>	初 <small>はつ</small>
船乗初 <small>ふねのり</small>	ひめはめ	藏開 <small>くらひら</small>	初商 <small>はつしやう</small>
店卸 <small>てんおろし</small>	初風呂 <small>はつふうりよ</small>	湯殿始 <small>ゆどの</small>	裏白 <small>うしろ</small>
三ッ物連歌 <small>さんぶつれんが</small>	三ッ物 <small>さんぶつ</small>	俳諧 <small>はいかい</small>	歳旦開 <small>さいたん</small>
一月吉辰 <small>いちげつきちん</small>	をえびて連歌	幸木 <small>さいもく</small>	門松 <small>かどまつ</small>
俳諧各席 <small>はいかい</small>	を開くをらふ	水祝 <small>みづい</small>	新 <small>あらた</small>
幸籠 <small>さいろう</small>	門松 <small>かどまつ</small>	祝 <small>い</small>	男 <small>おとこ</small>

あきまを七かの格といふ  
○葎句脇茅之の句格  
あきま  
曲 葎句位  
唐紫の松の春の夜  
み  
地 平句躰  
あきまの松の春の夜  
節 第三格  
唐紫の松の春の夜  
眺み  
日

水 <small>みづ</small>	今 <small>いま</small>	初子 <small>はつこ</small>	子 <small>こ</small>
六日 <small>むいっぴち</small>	年越 <small>としこし</small>	若菜摘 <small>わかしらみ</small>	あくつむ
紫 <small>むらさき</small>	仙 <small>せん</small>	座 <small>ざ</small>	松 <small>まつ</small>
蘿 <small>ら</small>	以上七種 <small>いじやうしちしゆ</small>	七 <small>しち</small>	種 <small>しゆ</small>
七 <small>しち</small>	日 <small>にち</small>	青馬 <small>あおば</small>	見 <small>み</small>
を <small>を</small>	依 <small>よ</small>	この節會 <small>このせうかい</small>	なりとど
あ <small>あ</small>	を <small>を</small>	踏歌 <small>ふみうた</small>	の <small>の</small>
歌 <small>うた</small>	を <small>を</small>	冠 <small>かん</small>	の <small>の</small>
初子 <small>はつこ</small>	子 <small>こ</small>	日遊 <small>にちゆう</small>	小松 <small>こまつ</small>
馬 <small>うま</small>	詰 <small>つめ</small>	春卸 <small>はるおろし</small>	全日 <small>ぜんにち</small>
富突 <small>とみつき</small>	七日 <small>ななにち</small>	十日 <small>じゅうにち</small>	乞 <small>こ</small>
賜 <small>たま</small>	ふこと	女叙位 <small>おんなじゆい</small>	八日 <small>やっぴち</small>
五尺 <small>ごしゃく</small>	三寸 <small>さんすん</small>	不 <small>ふ</small>	切 <small>き</small>
申 <small>まを</small>	壽 <small>しゆ</small>	常陸 <small>ひらつ</small>	帯 <small>おび</small>
初寅 <small>はつとら</small>	寅 <small>とら</small>	初卯 <small>はつう</small>	日 <small>にち</small>
女 <small>おんな</small>	王 <small>わう</small>	女 <small>おんな</small>	王 <small>わう</small>
卯 <small>う</small>	杖 <small>じやう</small>	杖 <small>じやう</small>	桃 <small>もも</small>
常陸 <small>ひらつ</small>	帯 <small>おび</small>	常陸 <small>ひらつ</small>	帯 <small>おび</small>

一日 歳旦 冬







するものといふ大いほ  
まじりて後句眼の附合  
を考ふると見定め後  
句と眼との附合を考  
詰まると附合しとく  
前より詩よハ此句  
の要格句より一  
考の出来不出来も  
此句の傷ふよるとど  
前より云ふごとく第  
この句格あらんま  
留りの文字よ論何

るべしとてさきでい  
此の字での字輕き  
手よ葉よて次の句  
及ぶはなまきのあひ  
あふべし  
但し後句の「か」留て  
みよよふ「か」あふは若て  
て留めあふべしとて留  
みらん「あふ」の留ハ  
系家よハその沙汰を  
初心ハ只で留に留て  
然る人きとてみよ葉  
も字留とらふことあり  
今考よかもうとて第こ

薬喰

寒中虚病の人鳥獸の肉  
を料理して食ふをいふ

早咲

梅椿の類なり

室咲 室の梅

寒菊寒梅

春を待 春隣

○春之部

二月

如月 今月

春 春ハ蠢たると  
動きて生じ

春ハ張たり草木の芽のちるなり

立春

大寒の後十五日 明けの春 四方の春 千代の春

凍久 節分 春永 寒春 寒牙 返凍 解

氷鮮 氷のひま 残る氷 氷のひま

春の雪 淡雪 雪解 雪の間

一日 吉野の餅くらり 一日 吉野蔵王権現  
備一餅を近国の

初午水間祭 初午の日 行基祭

事納 八日 針供養 遺教經

常樂會 十五日 比良八講 祇園八

九日 講八日 浅間祭 北野御忌 二十五日 道明寺祭

踊念佛 彼岸申の日小槻州四天王寺念  
仏堂みてこの事あり

二月十日八月十一日春秋 二月堂行全水取 南都東大寺  
み於て一日

二月十四日すて修業以七日の夜十四日の夜ともよ  
水屋の井み半玉を貼して水を取るなり

二月 春

六



とらふをいささう愛よ出に  
 雲雀啼小田よ持  
 頃なきや  
 梅咲て厨の草履  
 静なるを  
 竈馬もやと宮よぬ  
 啼所  
 月更ぬ鶯啼しりも  
 系やとれ  
 舟運て瀬も冷くも  
 ね中くも  
 各茅その句なりをそと

新の能 芝能。二月七日より十四日まで南都 廣福寺門前よて能をつとむ	西行忌 涅槃會。二月の別 積塔。十六日。光孝天皇の皇女雨夜の御 子の忌日なり此却宇は座 入滅日 とれ 頭の官始る依て盲人此日 琵琶を弾いて思を謝ると云 の却忌して天王寺ふ於て 修行に伶人舞樂ありて 花をさう太政官少て 政を行なをさう	若艸 新艸 落の臺 ふまふめ 若艸のま 出るとふ	聖靈會 廿二日。聖德太子	列見 十日公卿 殿上人冠	下萌 若艸のま 出るとふ	水菜 水入菜と もふ西京	嫁菜 嫁うも	野大根 のふん
鶯菜 うぐいす うぐいす苗の二三寸 ふなうぐいすをりふ	若艸 新艸 落の臺 ふまふめ	水菜 水入菜と もふ西京	嫁菜 嫁うも	野大根 のふん	若艸 新艸 落の臺 ふまふめ	水菜 水入菜と もふ西京	嫁菜 嫁うも	野大根 のふん
近辺より つる	積塔 十六日。光孝天皇の皇女雨夜の御 子の忌日なり此却宇は座	若艸 新艸 落の臺 ふまふめ	聖靈會 廿二日。聖德太子	列見 十日公卿 殿上人冠	下萌 若艸のま 出るとふ	水菜 水入菜と もふ西京	嫁菜 嫁うも	野大根 のふん

○四句めふりと云事こ  
 ハ系物昔情ささる  
 ナリ四々和合の教こ  
 重きハ破る種まはと  
 とのめとらふと専ら  
 てふえに更流すま  
 かなを古句よりて地  
 の句の作例なる  
 前もふ一巻の極も

梅 春吉艸。香散草。白い草。已上梅の 異名なり	好文木 晋の武帝 の故事	飛梅 筑紫の 菅公の故事	未開紅 梅屋舗	田を鋤 田久れ。畑打。何きり田畑の上を 畑えり。種つもの。いさき久れをりふ	梅 春吉艸。香散草。白い草。已上梅の 異名なり	好文木 晋の武帝 の故事	飛梅 筑紫の 菅公の故事	未開紅 梅屋舗
梅 春吉艸。香散草。白い草。已上梅の 異名なり	好文木 晋の武帝 の故事	飛梅 筑紫の 菅公の故事	未開紅 梅屋舗	田を鋤 田久れ。畑打。何きり田畑の上を 畑えり。種つもの。いさき久れをりふ	梅 春吉艸。香散草。白い草。已上梅の 異名なり	好文木 晋の武帝 の故事	飛梅 筑紫の 菅公の故事	未開紅 梅屋舗
梅 春吉艸。香散草。白い草。已上梅の 異名なり	好文木 晋の武帝 の故事	飛梅 筑紫の 菅公の故事	未開紅 梅屋舗	田を鋤 田久れ。畑打。何きり田畑の上を 畑えり。種つもの。いさき久れをりふ	梅 春吉艸。香散草。白い草。已上梅の 異名なり	好文木 晋の武帝 の故事	飛梅 筑紫の 菅公の故事	未開紅 梅屋舗

二月 春

七



曲節地ありとハ第三以下  
 の面ハ皆地の句より  
 亦も同じく二の折ハ半  
 地半節との折ハ曲節  
 名所の折ハ地と心得て  
 扱ふべし惣て長句ので  
 留あるときハ次の短句不  
 ありので又字あはるは  
 本懐紙の一句ヲ新書の  
 時で又字あはるは故まふ  
 ちり但し是をハ第三四  
 句めは限りてはまふは  
 何れハ遠慮あはるべき  
 こころなり

○月花の事見ハ月と云

して折々ハあや花も  
 四季ハあはるし百夏の  
 四折ハ花四本名所の  
 裏の月ハ物見ありて  
 今式四花七月の式  
 ありその月花不定  
 度ハあはるれとも古句  
 正月の例例ハあはる  
 へてあはるべきを  
 求めば其法の辞義  
 不志ハあはるは又ハ  
 老人字直等へ渡

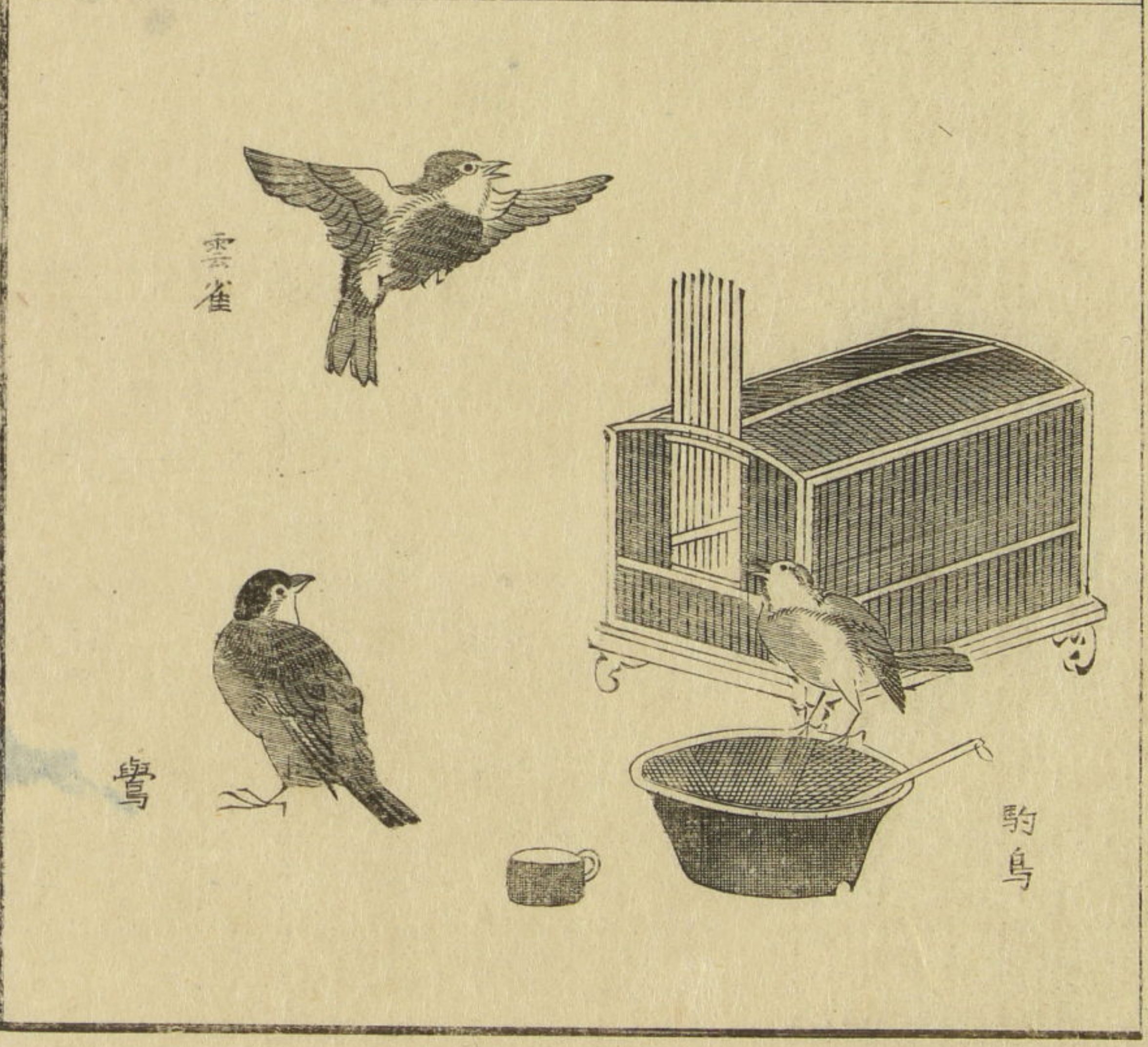
○とすり狩 是ハ宵子稚子の啼く処を聞かき ○もこた 未明不行きてとくを鳴鳥狩と云 も名鳥とハ朝鷹つらと云ふ 鈴のかけぬやう竹をこの枝を 継尾の鷹 鷹の尾ハ鶴の羽を継で雪のうら やう見まは山へくころ忘るなり 是を継尾中と白尾とも云ふなり	鷹 春の鷹 鳥さうる 鳥ハ尾を以て交合 をなす故鳥尾と云	猫の戀 佐保姫	浅 蛭
○妻を猫 猫さうる	白魚 飯 蛸 蜆	霞 霞の波 霞の袖 霞の窓 霞の窓 霞の窓	雪氷解 雪氷解
山笑ふ 万山春色を 催をかり	雪氷解	九 霞 霞の洞 仙洞をア 九 霞 仙境を 霞	霞 霞の洞 仙洞をア 九 霞 仙境を 霞
○三春を煮る部	三春煮 佐保姫 春の野山を守る神 神祇ふあはる	霞の命 仙人ハ霞を食して命を延ぶもの と云ふ故長きことと云ふ	霞 霞の命 仙人ハ霞を食して命を延ぶもの と云ふ故長きことと云ふ

霞と いふ	霞の洞 仙洞をア	九 霞 仙境を 霞	霞 霞の命 仙人ハ霞を食して命を延ぶもの と云ふ故長きことと云ふ
麗 く	暖 ぬ	水 温 鶯 鶯の琴 鶯笛	流る霞 以上酒 春のほだ 霞を 長閑
○金衣鳥 ○春告鳥 以上鶯 ○とくめ鳥 ○歌詠鳥 の異名	鳥轉る 水鳥と云ふ 百千鳥	鶯の琴 鶯笛	霞の命 仙人ハ霞を食して命を延ぶもの と云ふ故長きことと云ふ
○ひめひな 鳥 ○異名	千 鱈 千 蕪 千大根 永き日	雲 雀	霞の命 仙人ハ霞を食して命を延ぶもの と云ふ故長きことと云ふ
遅き日	風光 了 東 風 海 雲	雲 雀	霞の命 仙人ハ霞を食して命を延ぶもの と云ふ故長きことと云ふ

三春煮



て月七句め花十三句  
 めと定まりし事し  
 能々心付て句あお  
 るべし  
 但し雪月花ハ和歌連歌  
 の風骨として句作ハ連  
 歌めくこと多くあること  
 ナきは心の俳諧忘るべ  
 うは花ハ褒美の詞と  
 略言へバ。玉垣。玉の春  
 ナどふり如く。花舞。  
 花やうもやまろ心の花  
 正花痴はま揃よ云花ハ  
 様にて様子何れやう



さうまあささうまあささ  
 とりて深く其趣をた知  
 るべし月もささの如し  
 三五夜中のこ月あハ何  
 ら燈籠好の法ましく、草  
 もも隈かきさたのこ見  
 ものうわとここふ心を付  
 て見えべし又云月花堂  
 庭より苔ふ吟あけみ  
 月おとすまで月花は結ぶ  
 ことら細なり

○蘇月月の事定なりハ  
 天象のさりありて次  
 へ送りし時月乃

形乱ま 糸のこ	水松	海苔	相良布
。ひづき。海中に生 る草なり	。さめんのり。興津のり。葛西のり 。浅草のり。松のり	。鶏冠のり。松のり 。さくらりのり。青のり	。初緑のり。松のり の異名
若松種はめ	柳	折柳	椿
。筐柳。柳の糸。玉柳。根水柳。春まき 。柳の腰。玉柳。根水柳。春まき	。楊と言。芽え柳。青 柳。瘤柳。柳の眉	。旅立留別 。つふとらん	。是ハ相つら 。ま椿をり
十回を若さ	みどり立	芹	波菱菜
。さめんのり。興津のり。葛西のり 。浅草のり。松のり	。初緑のり。松のり の異名	。根白草。田芹 。一名を名くとり	。波期草 。赤根草
門の柳	折柳	三葉芹	
。玉椿。菽椿。白椿 。伊勢椿。褒美の花。若椿	。旅立留別 。つふとらん	。二月末より苗生 。三月頃専喰ふ	
菅	芹		
。唐ちさ 。川菅	。根白草。田芹 。一名を名くとり		

三春 兼

九



産の新秋の意中の句  
をとして次の短句と奇  
乃下の句のやうよまうく  
と月を流びよまよ  
はまよまよ

○二句の花の扱とり  
あやまは花の産乃  
お越お植物あつて差  
合あまき時の用なり  
そぞろ花好花の姿  
かどの類よて物よよ  
とていふをよま月も

みお越天象のさし合  
あるときハ。玉兎。桂  
男等のま名名替て  
いふはと云ふ  
○戀の句乃事秘翁の  
云古式を用ひよと  
。娘。女。枕。忍な  
との文字名目本句  
不結び恋とかなとハ  
誤かるを壁言ハ娘が  
先へまてて母親とよ  
句ふ恋ハあへんは

穀精州 。ろし州 。さい星州 。三四月頃 。田の中生た	獨 。活 。慈 。姑	摘草 。雜菜つむ	山 。葵 。山中の水近 。き処は生た	烏羊	本地の爐縁 。茶人冬ハ炉ふぬいぶちを用い 。春を木地をもちうらかり	春の夜	春の風	春の朝	春の山	春の野	春の川	春の海
東宮の御事 を申せん	朧月 。春の月	朧夜	春の空 。春のそらハハ 。ものどつちを	春の夕 。夕と暮 。夕日良 。暮れをき 。暮うら	春の野 。春の夕 。のどけき空 。朝きよめ	春の夜	春の朝	春の山	春の野	春の川	春の海	春の海
を催を	春の月	春の夜	春の空	春の夕	春の野	春の夜	春の朝	春の山	春の野	春の川	春の海	春の海
。霞をまよ。波の花	春の月	春の夜	春の空	春の夕	春の野	春の夜	春の朝	春の山	春の野	春の川	春の海	春の海

花のちりうめさよ雪消えて 水やきりし休たを専らよめ 生げるとの音ハ木音なり舞樂 なども春ハこの調子なり	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中
花のちりうめさよ雪消えて 水やきりし休たを専らよめ 生げるとの音ハ木音なり舞樂 なども春ハこの調子なり	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中
花のちりうめさよ雪消えて 水やきりし休たを専らよめ 生げるとの音ハ木音なり舞樂 なども春ハこの調子なり	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中
花のちりうめさよ雪消えて 水やきりし休たを専らよめ 生げるとの音ハ木音なり舞樂 なども春ハこの調子なり	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中	紙 。紙老鴉 。鳳中

三月春

二日。撰州四天王寺小有  
本尊如意輪觀音(かみ)

十



その句の姿情不意の  
心あふさまをこひと  
いふはとこし

物さふねふ男の

あまのまじり

是等よ恋句の心を  
熟得まじり又云お  
句ハ恋とも恋ハ此に  
とも恋めまじり句に  
恋をまじり附合せ  
前句もとも恋とあ  
以て愛を他門は恋を

日疾風甚雨あり  
まじり寒食と云

上 己

三日。重三  
元己。上除

己の日の稜

水辺不稜して疾  
病をのぞく

須戸の稜

是ハ源  
光氏須

廣左遷の時人形を  
造りて流せしことあり

闘 雞

禁裏ふて朱雀院の御  
宇より起まるとぞ

桃花節桃の酒

白 酒

草の餅。蓬餅  
菱の餅

雛

雛 祭。紙ひる。ひな飴。雛市。雛棚

雛 市。雛棚

雛 市。雛棚

青きを踏

三月三日踏青鞋履を上る是也

唐の俗上巳の遊戯

を云ふ

油花下

洛陽の婦女花下を  
油ふ点して祝ふなり

曲水の會

巡水宴  
會盃を

巴の字注水

句ふむまじり三月三日不限る  
べし曲水の形巴の字に朗

詠ふも  
出さる

柳の髪

御 燈

三日。聖上北斗へ燈明  
を奉りたまふ

柳の髪

柳の髪

三日上巳女兒の戯まふ柳不桃をさしやうへ雛まつり  
供し髪もさしをさむたりかくたまふ萬毒毒

一句まで捨るといふと

いとも合して二句な

まをその句みつきて

可たし程程の云恋

ハ風程の花実あま

を二句より五句み

るといふも先ハ臨場

の道理を定めても

是ハ他家の書明小

して他門は向て穿

鑿をなすはとこし  
句ひの花の事。神

粟津祭

三日 江州鳥ヶ川  
御霊の祭

潮 干

旧曆三月三日海潮大ふる  
かりこの日住吉千沙祭あり

蛤み

泥中の蛤を  
とをみ

土佐の海硯石取

三日土州西寺の海  
底より研石を取り

石山祭

三日江州石光岩山寺の鎮守  
三十八所明神のやうなり

一乗寺祭

五日。八大天王の社洛北の一乗寺  
あり祭三座共祭あり

石清水

石清水

祭

山城の国男山八幡宮天明三年三月八日  
臨時の祭りあり南祭と称す

水尾祭

水尾祭

祭神清和天皇なりと云ふ

吉野會式

十一日  
大和国

吉の山子守勝手両明神の神輿東堂へ渡  
御となり花會式と人と只所の花とぞ

壬生念

壬生念

佛

十四日より廿四日まで心浄光院と云ふ世俗壬生小あ  
るを以て壬生寺と云ふ昔正安年中田覚上人の寺に

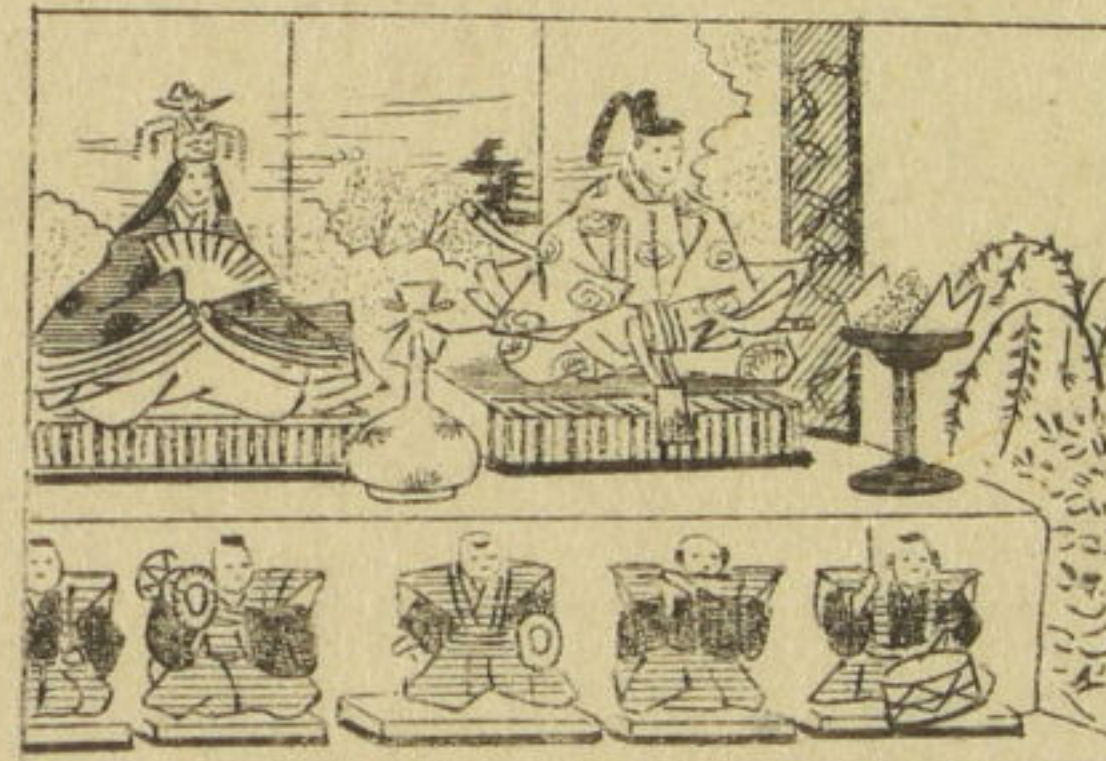
住して始て融通念仏を修り今も於て十四日より廿四日まで  
念仏ありとの間土人俳優をなす是を廿壬生狂言と云ふ


念仏ありとの間土人俳優をなす是を廿壬生狂言と云ふ




祇。釋教。祝儀。  
 婚禮。新宅。本  
 陣。追悼等ふるま  
 らば何成とし花見。  
 月見の会ふいふと  
 数句の心をうけて  
 名残の花よ云歌を  
 以ものちまきば白ひの  
 花とよふとたり或考  
 ば  
 春の柳や柳よ  
 譲り花あはるる

祭 離

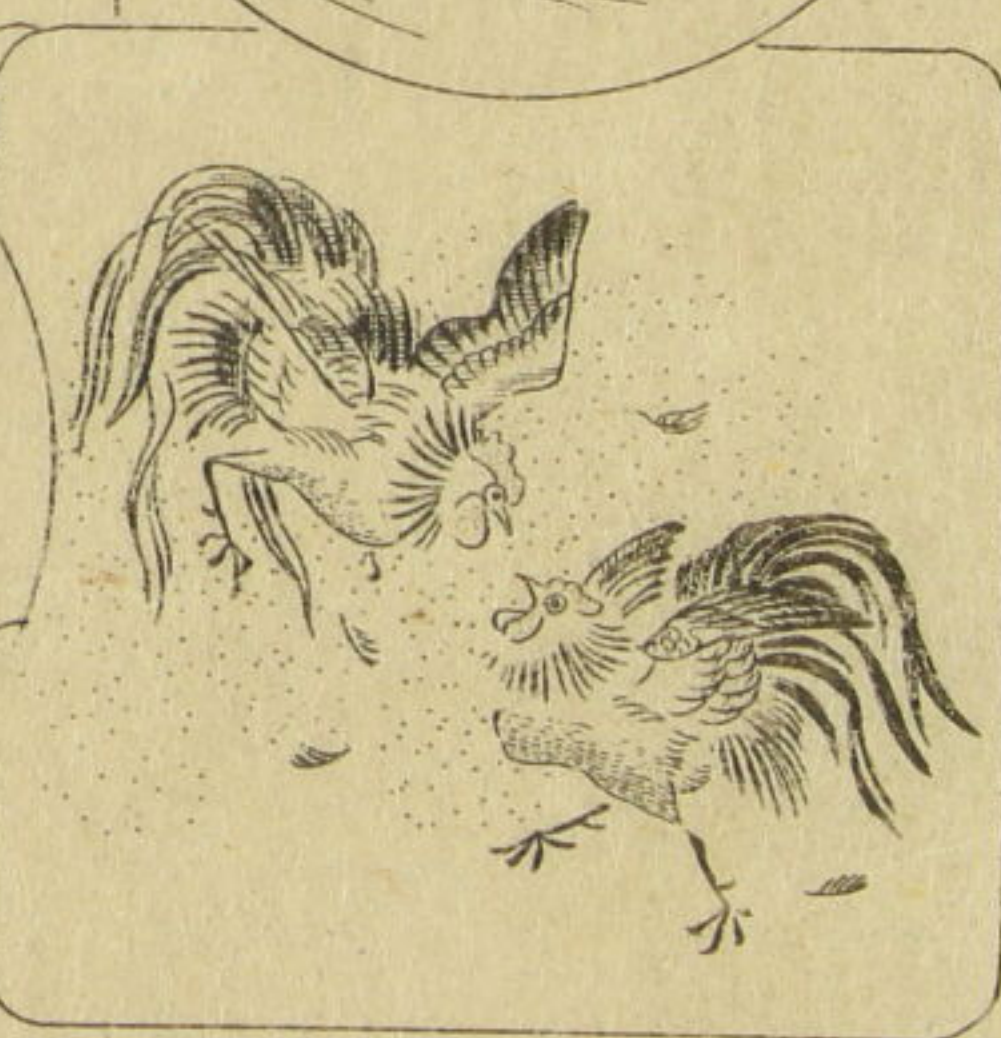




曲水



雛合



兒女柳髪挿タル図

照 ぬるむら池よ  
 魚躍るる音  
 白ひの花  
 花のりた板と  
 長く糸と正ひ  
 挙句ぬるめくと  
 蛙鳴るる川

影のぬる挙句と照の心を  
 白ひの花と挙句とよま  
 て風をよむのをまはま  
 かりたよをそ途のぬ  
 白小別まゆとあを照ハ  
 留 守かむの留別の心  
 を接投して名残の花ハ  
 伸りを待つとらふ心よ花  
 を結ぶちり挙句もその  
 心得ありてりい流流  
 み云式の会よて花の白  
 吟ありのとき香をさす

<p>嗟峨念佛 九日より十五日やせう嗟峨清涼寺よあり こまゆゆうづう念仏の余流かぞ</p>	<p>千本念佛 朱雀通り北松岡の南弘 接寺の間広堂よあり</p>	<p>十五日 江州比良村 の祭なり</p>	<p>梅若祭 十五日</p>
<p>大念佛會 東都隅田川梅柳山木母寺 みて行ふ諸人羣集れ</p>	<p>十五日。三月九月西度真林寺月輪院みて行ふかう天 台の大衆法花を修り紀典の儒者も詩聯句を</p>	<p>浅草祭 十八日。ひんきり。叢市。東都浅 草寺境内三社権現のちりり</p>	<p>比良祭</p>
<p>人磨忌 十八日</p>	<p>御身拭 十九日。山城国嗟峨清 涼寺の本尊釈迦</p>	<p>如來今日開帳なり寺僧白巾を以て仏像を ぬふひぬふこまを御身拭とらふかぞ</p>	<p>木母寺</p>
<p>部 十九日より廿八日まで。長栄山本門寺みて法華經千 部千口の談誦あり日蓮宗東都第一の大寺なり</p>	<p>御影供 廿日。弘法大師の御影供たり仁和寺 其外真言宗の寺院よて是を修り</p>	<p>池上千</p>	<p>勸學會</p>

三月春 十二



くまよりにて句ひの花と  
もくま以下略を法源  
多し

○ 峯句の格先ハ句ひの

花の念入と心得  
可なり地の句の軽  
を専らとして其一

卷の結びたまきをも  
さうらうとひあま  
心を肝要と心得べ

峯句 余の竹なり  
草子んほく水

永代寺山開 廿一日。東都深川富岡八幡の別當大  
宗山永代寺に於て弘法大師の

御影供 順の峯入。春大峯山上れふを  
を修り 順の峯入りとらふ

昔内裏ふ此事あり  
地下も春の遊びとら  
立春より五ツめの戌の日をとりふ日土地の神を  
祭り豊年をいのる燕ハ春の社日未秋の社日歸す

春秋二度あり七日の間なりひん  
の四日を仏氏号て中日とらふ

と苗代の水口へ幣を  
を立てつらふ

治聾酒。社日酒を飲めは聾  
聾を治まらふ

水口祭。水損等のう  
まひつせト

出代。雇人の出  
田畑焼野山焼。芝焼

苗代。畑打。畑うへに。田をくま  
田をくま

黄。此月實熟して  
小粟の如きを云  
何きも種をつけ  
了井をらふ

種時。種ふせ。種たろ  
種ひれ

種藍麻時。上古麻仁  
を五穀の

狗脊。早まらば。わび。紫のちり

杉菜。土筆の丈けて葉を出  
し。或ハ形土

枸杞。五加木。虎杖

胡葱。野蒜。連翹

水葱摘。一名蘇菜。三叉國會水あふ夏花あり  
紫色なり但しあきとらふ三種あり

薺花。異名を護生草。三緑  
草とらふ花白し小兒此

菜の花。大根の花

草の着葉。末黒の

萩の焼原。秋の末黒

草芳。角組。芦の角  
芦の角。芦の錐

蓬摘。江州伊吹山  
ふたわし

此句体のてくま  
といひあま

雲をなま

子細ある峯句

峯句 屏風のうけ

見ゆる草子

○ 附合心得

○ 附合子趣向と句作

との事先趣向をま

んと思はくその一折

又ハ四五句の運いと

附合心得

三月春

十三



三句の液りこま打越の  
 あんをんを勘弁し  
 ぬ又前句と打越と  
 の附合の内情をど  
 とときがしその附心を  
 足さしは其附合  
 情をつき離し  
 て附し其句の趣向  
 の見立を軸とす  
 別よりよき姿を見出  
 し其後又句作を平  
 示もあつてつくりあ

句への業りの白ひり響き  
 して付合を厚く但  
 吟詠の極みよのこ  
 と何とべし  
 其席よりまばらに和歌を  
 句を付んとおふ故先  
 趣向して付合せしむ  
 句作の趣向をうき  
 斗り思ふゆゑ趣向を  
 殊の外驚かすも能く  
 工風も出れそをむり  
 付しものこもやうに  
 出しあはれい前句を  
 多う付けたりたりと  
 るたりと前句の見  
 立悪く付合のてん  
 らもき故たり能く  
 の情をまあるし時わ  
 らも面白さを具しあ

銀杏花	接骨木の花	木を煎じて用ゆ。功ありゆゑ骨接の名有
若紫	根の皮を以て絹布を染る昔はまろく	衣をそのめたり是をすり衣といふ
紅梅	鶯鶯梅。麗枝梅。越中梅。櫻梅	座輪梅。八重梅。黄梅
彼岸櫻	小ざくら	山櫻。八重さくら。十日ざくら
糸櫻	ひん櫻	一重櫻
熊谷櫻	花の早く咲くゆゑ一の谷	魁の心を名付し
初花	花を待接木	接穂。春分前後
菊の若葉	萬の若葉	芳宜の若葉
果鳥	鳥の巢	引鶴
引鶴	引鴨	鴨
鹿の角落	鹿	蜂
蜂	蜂の脾	蜜ハ夏巢の内みたくて
胡蝶	鳳車	月蝶の夢馬
寄居虫	管の如く	寄居虫

果鳥	鳥の巢	引鶴	引鴨	鴨
鹿の角落	鹿	蜂	胡蝶	鳳車
寄居虫	管の如く	寄居虫	寄居虫	寄居虫

三月春







度み此法ふこづば附  
 改延引を度く是ハ  
 前句のむづりき時  
 用法より常々熟  
 味ふせざるハ其時其  
 場の働き見束あ  
 らん先大方ハ有心  
 と。今釋と。述句と  
 の三法を志すと此ハ  
 附合一通り自在なる  
 るべきものなり  
 たんとを医門は二十四の脈  
 法ありと人にも不詳と

一日 近江国坂田郡筑广の庄  
 鍋あり。筑广の社の祭なり  
 住吉卯

の祭 撰州住吉のやうり祭の日神主称宜  
 等卯杖を持つ是を忘まし州とらふ  
 大神祭

大和国城上郡祭神大己貴の神より三輪明神なり大  
 神とハ大三輪の神より大物主の神の御事なり

稻荷祭 卯日。山城国  
 紀伊郡  
 山科祭 上ノ辰日。勸修  
 寺の

境内社還路傍の北の辺にあつた社を祭る延醍醐帝の  
 外祖宮氏夫婦の天神より勸修宗の祖なり

八瀬の祭 上ノ辰日。八王子天満宮両社の祭なり天  
 満宮の社ハ山城国愛宕郡矢

脊の里 江州八幡祭 中ノ卯日。法華ヶ峯八幡  
 あり

生郡八幡村ふあり祭  
 多賀祭 近江国犬上郡祭神  
 伊弉諾尊なり

堅田祭 上ノ酉日。山城国葛野郡祭神  
 大山祇の神なり

當麻祭 上ノ申日。大和国禅林寺世俗當麻寺と云  
 用明帝第四の皇子磨子創り祭

當宗祭 上ノ酉日。河内国志紀郡当社社の社  
 大津祭  
 上ノ亥日 四ノ宮の社ハ江州大津四の宮ふあり祭神小日枝  
 大日枝。氣比。小禪師なり

梅宮祭 上ノ申日。祭神橘氏の祖庶小して世俗姓  
 娘の婦女当社社の砂をとりて帯

襟小佩 山崎日の使 三日。日の使ハ八幡宮第  
 一の神事なり治

兼三年迄猶勅 水屋能 四日五日。南都水屋  
 使の義あり 祭の日申樂あり地人藝能を施すとらふ

擬階の奏 七日。誰々小加階せしきよと儀  
 奏して奏議のことなり

灌 佛 八日。仏生會。竜筆會。五香水。是日  
 浴沸。仏産湯。甘水 諸寺

みて灌仏會として釈迦の像  
 を安置して祭るなり

賀茂の祭 中ノ酉日  
 祭祭。御形の日。赤の日上郷陣小着て六府を  
 葵らら。諸らら。めり警固のことを仰せ當

浮沈遊藝の四つみて満  
 督徑絡のハ脈をも伺ひて  
 三方を付け加減して病を  
 治すも如く先その付句の  
 意方ふより付くとさしお  
 越と前句の意情と付心  
 ことごとくと呑込さるる  
 有心の階此ハ今釋の場  
 の述句のところがと前の  
 附合のあんをいを見て附  
 了句の趣向を立付方ハ  
 作の肉より其人々やけ  
 甘坊りてもたふ家りても  
 句作をかなべきなり但  
 句の活路(句の走)ハ  
 兼といふ示意の上より  
 のやうにたるとさしお  
 次の附合の注子考合と  
 知るべし

○案方七名  
 有心。起情。向  
 附。今釋。述

案方七名

四月 春

十六



句。色立。相子

有心しんたい 一字一言に心な  
くそり細りよ前  
句の流ながを

春の日

前句  
あつたはよ

よる見を置

付句

表見母深りそ越人

あつたはよ

前句

むつくと月見

鳥の祝いわを

曠野

付句

人の活いき 日

ままもたす

前二句の附合を心の

有心しんたい 心の

もいふなきのあつたはよ

前句の心こころの

又曠野くわんげの付合くわいはよ

不人相ふにそうのあつたはよ

ハ二句のあつたはよ

細こまやうたすことハ余

細こまやうたすことハ余

筑戸祭り



日光  
祭り

灌佛ノ図

日の使ハ近衛の  
中将つとむ

戒壇堂開帳 八日。江州比叡  
山山あり

諸人参詣さんぎは女人常ハ叡山叡山に登ることを得さるも今日  
ハ許して東坂下花橘はなたちの社やしろに詣てむ是を花橘と云

花摘はなつみ 前まへふ同ト傳教でんきやう大師だいしの母妙徳めうてつとく  
婦人めづををかりりととりへり

八日。山城国離宮りみやうハ幡はたの傍はたに  
あり大山おほやま祇ぎの命のみことあり

権現ごんげんの祭まつりあり祭まつりる神かみ  
田村將軍たむらの灵たまあり

法會ほふゑを修しゆ練れん供養くやうあり  
ここ中ちゆう將しやう姫ひめの忌い日ひなり

寺てらの鬼おに子こ母はは神かみハ今日けふ諸人しよじん参詣さんぎはるの神かみ一千いちぜんの子こ  
ああつたはよ

日光祭にっこうまつり 十七日。十六日例幣使れいへいし野州日光  
山山ハ参向さんかう拜礼らいらいあり

十七日。紀州和歌山きしゅうわかやまあり東照宮とうていしやうみやうの御ごあり  
たり一名いちめい雜賀祭ざがまつりあり

千部せんぶ 一日より。東都深川道本山とうとふかみちほんざん靈たま  
十日まで。うん寺うんじにて修しゆり

四月 春

十七

浄心寺

靈巖寺

和歌祭

千團子

地主祭

山崎祭

花摘

戒壇堂開帳



情み考見し〜余ハ

略レ

起情 風葉のそこの句も

前ハ手もたうさうさうと  
と逐々〜と〜と〜と  
句の尾ひま〜と情を  
起はをりふ但〜風葉  
勝のときの間たる

炭俵

前句

ほ〜と見えん

二十四日

付句

ひ〜とまは珠は若

軍の大事〜

日よ

千部 十九日より。法花山淨心寺日蓮宗東都深川第一の  
廿八日まで。大寺なり毎年十日間法華經千部の

談経 高野花供養 廿日。高野山宝亀院の住持  
あり 代々よこよ預了〜

ひま色の御衣を大師奉  
了これを花供と〜

賀郡坂本ふある日枝  
神社の祭典なり

齋 刺 神事せんとして松竹  
神をささん〜

川河波神社の祭なり  
吉日をあらむ〜

御の建 駒 率 駒ひまは白馬の節會の如き  
物みて来月の騎射の馬射手人

等を御覧せら〜と貞觀のころより始まり八月  
も駒引とらふはあま〜その事うらハ違ふた〜

矢 數 洛東三十三間堂蓮華王院とよ是の池中の  
杜若を杜觀とけ九の所の矢數毎年四五

頃晴天を候ひて  
修了したる

江の島掃除波 相州江島  
嵐并天し

前句

何を見んるよ

付句

花と散ゆハ 日

西念うららまきそ

向 附 人情二句附人  
て附〜思ふと〜の用

たり前句の人よお向ハ  
せ〜人をお對さん  
ることと〜

猿蓑

お越

魚の骨志ふ

とこの老を見て

前句

この島当月一日波濤突衝して山屈のうちふ入るときは并財  
天女洪波を以て嵐中の汚穢を払ふなりとぞことを

御掃除波 爐 閉 廿日。茶人冬春ハ爐を用ひ夏秋  
ハ風呂を用ふ故ハ炉を閉し

初 虹 忘 霜 竹の秋 竹ハ此頃  
の氣候ハ秋

初 花 田鼠化して鶉と成る 萍 生

花の肌。花の粧。花の唇。花の輪。花の戸  
花の鳥。花ふさ。花びら。花の宿。花の扉

花のろ。花の窓。花の袖。花の袂。花の籠  
心の花。詞の花。花の袖。花の筐。花の桶

花人。花見車。花車。花筏。花結び  
花筒。花瓶。花笠。花づも。花の宴

花靴。花遊。花の繪。花の香。花踊  
花の都。花洛。花々。花の主。花守

花圃。花の鏡。花の雨。花の錦。花の幕  
花を。花の鏡。

四月 春

十八



侍人の  
去来

付句  
ふた門のうぎ

立く里辱風をれ非

倒れ女とも

暖野  
お越

一ふのまひ

雨後の木とげ

付句  
おむき人の付

初嵐を川瀬の野れ

案の坊まとも

付句

葉細ふむなと

護花鈴。鳥を驚かす為め  
花不鈴を付る

花 皿。仙小供に花を盛る器  
花籠もこのたぐひを

落花を雪不見立  
花の縁。一説に花の淵の誤り  
花雪吹

花細。花をほめた  
法の花  
雨花  
智恵の

花。是ハミナ  
落花飛花  
惜花

残花。ちうのころも  
櫻  
山ざくろ。奈良櫻  
う小櫻。雲井の櫻

遷。滝さくら。千本櫻。南殿の櫻。未ざくろ  
櫻。庭さくら。家さくら。あむさくら。糸ざくろ

浅黄櫻。八重櫻。山中の題ふ八重さくらハ作ふ  
花。葉の間けり花の出るさくらなり花と鼻  
普賢像。と葉と齒と訓同トさくらハ象ヲ思

普賢像。葉の間けり花の出るさくらなり花と鼻  
楊貴妃。興福寺の僧玄宗  
墨染櫻

ひよせ  
名づく  
楊貴妃。興福寺の僧玄宗  
墨染櫻

雲珠櫻。馬唐鞍の雲珠  
花の莖短く枝上の花葉  
班文あるゆるふ名づく

江戶櫻。是もおをさくらたり花大輪  
虎の尾。八重なり  
枝條屈蟠  
伊勢さくら。花の終

名づく  
江戶櫻。是もおをさくらたり花大輪  
金王櫻。一名憂忘  
櫻とらふ東

塩竈。是も櫻なり葉を見  
都澁谷八幡の社地にあるなるを  
淡谷金王植るとらたりとぞ

歌仙櫻。東都深川  
八幡乃社

秋色櫻。東叡山清水寺のうららの井の傍  
ふあり一名大般若櫻とらふ秋色  
狩。紅葉狩をたがねて遊ぶ  
紅葉狩をたがねて遊ぶ

櫻。田。地名  
人丸櫻  
夢見草  
曙草

あつまつて丸く  
手すりふ似たり  
人丸櫻  
夢見草  
曙草

吉野草。以上櫻の異名なり  
桃の花。一歳桃

四月春  
十九

會。お越むつりき時  
お越むつりき時  
お越むつりき時

暖野。おむき人の付  
おむき人の付  
おむき人の付

又就まの  
おむき人の付  
おむき人の付

皆遠ひくを  
おむき人の付  
おむき人の付

灯基の油  
おむき人の付  
おむき人の付

二層て押さへ  
おむき人の付  
おむき人の付

月花よたを  
おむき人の付  
おむき人の付

よせて高ふせ  
おむき人の付  
おむき人の付

付句  
おむき人の付  
おむき人の付



意よめの境のぬれ

かきつばたの

遊句  
お越前句の附  
合紙付とむつ

付迎へく遊伴何れも  
を春景色風雨を  
生かす梅もさきこそ  
ついでに  
あめ

賣物の滋味を

おろしおき

付句  
くしの思ふさへ 馬芝

そよよもせぬ

白  
あめ

大切なりが

二百ありそよの清

付句

雪うきとけり 春

中のどろろ

色  
あめと四句の涙  
むつとく付書  
時の用なりたとて  
いま春のと付るこそ  
花句もあさきれと  
花板のやままを  
白小とらふ句一  
あめと南天と  
いふこと

きり透る梅と  
かきつばたの  
あめ

油桃。又異名を三千世  
毛も。御酒古州とらふ

源平桃。江戸も。日月も、  
金銀桃

壽星も  
ともソム  
緋桃。八重なり  
深紅

蕪枋の花。此花本邦ふか  
花とらふハ紫荊花のこととらふ

李花。異名。東苑。道傍  
和名うめつさを花

櫻桃の花。異名甜梅  
りらんたの花

模花。異名を類婆果  
文珠郎とらふ

梨花。瑞香。春是をさ  
木小

梨の花。ありの実花  
棠梨の花

葡萄の花。木蓮花。木蘭  
木蓮花。木蘭



四月春

二十



付句

赤いふ宮ハ 釣半

秋のうらみ

故人の云色まはるる

まとはるるあざりとそり

其沁句ふ

有附合名集

有句

兼悠の挑打

名めは朝あじ

付句

波さしやう 翁

海川の橋

拍子

一巻のしををを  
澄のあまはるを

辛夷

。四手こ  
。おし

馬酔木の花

長春

。日月紅

。不斷絶花ひく  
。故に長春の名なり

躑躅

。山つど  
。餅つど

。岩つど

。蓮花つじ。浅黄つじ。紫の山つじ

。瑤瑤つじ

。姫つど。源平つじ。小式部つじ。開山つじ。鬼つど

。岡つど

。何いつじ。紅花ひ

平戸つど

。

段つど

平戸つど或ハ琉球つどと云ふ段つどは  
地名なり上加茂の南の上小檀と云ふところ

。神事場なり。赤。紫。餅

。蓮花の四種と云ふ所あり

火取草

。つどの  
。異名し

まんげつど

吉野ふ多し遠く見ま  
蓮花の如し花黄なり

映山紅

。

葉少く田く花チリ又小きくまなり花  
開きて尤若げり或ハ白花のものあり

藤の花

。

。藤浪。藤らら。藤棚。藤つど

。下り藤。藤の丸。藤窟。藤綱

令法

。

藤の若葉とも入り又一種ありて山年ふハ  
飯みやうへて喰ふ大ふ易あつものなり

茶藤花

。

。白山吹

。面影草

。花。俗にまを小米

。東菊

。花菊ふ似て薄

。紫色なり

。春菊。高麗菊

。櫻草

。旌節草。九輪草

。七重草

。花大なり

。仙臺萩

。秋ふ似て花きなり

。昔菫と云ふ草

。華鬘草。花の形ケマンを

。

。母子草。無に草

。佛耳草

。馬蘭。葉長き二三尺中三分

。花六弁淡紫色なり

。似やめふ

。碎米薺

。蓮華花

。白茅。花の形自

。葉をんたり大ま

。花紫なり

。艾の花。雞頭。鴈頭

。水落

。故に名づく一説

。子鬼筋と云ふ

。眉作花。鬼あざ

。花の形眉

。似て小さく

。けいのかくいふ

。海金沙。あみぎさ

。あみぎさ。あみぎさ

。

。

。美人草。眞美人。麗春

。錦被

四月春

二十一

ちうは時の用なり或書

は「鏡もちのたもとへまは

巴」をいふ句へ「雪はれざ

は今が三む」と後づくし

み取なすて附さるること

ありてはふたむねなり

曠野

有句

あづきとまのふの

市の塩はあ

付句

狐つきとや

越人

人の見ゆらん

猿の

境より面の青

Amur's ...



かゝるの社々 翁

よいかたをんし

此のよ又一体あり

空撓  
對付

空

撓 ことごとく作をたは  
めしむるがごとくこと  
う附くこと空ありては  
なく二句の字は自然  
と付くことをふかり  
ては「藤子よりけの月  
ちつと」といふ句は  
「聲どの冬どきを」と  
の目をぬぐひ」といふ

炭たこ

燃志さるる新を

既手みさくして

付

十四五歳の 孤登

悔やわす

ひこ

一貫の漆あり

付 一貫と漆あり

醫者の業ハ 翁

吾やあふ

對

附 此の二句對

あはれ心の對せしむるを  
以て付る案方とをいひ  
暖野  
翁  
理をそなへん

仙臺萩

春菊

旌節草

馬蘭



○さあうら

大和にて三味線をつつとらふ宿根

海老根

化論草  
本名山宇波良

丁子草

葉柳に似て花丁子の  
色は浅黄色なり

蘇枋の花

色を染る木  
別名あり

金盞花

長春菊

花金紅色大さ指頭の如く  
形盞子に似たり

莖

壺莖

草の  
形墨

手不似しれが和訓  
墨入の畧り

榎櫨の花

木本子  
花淡  
木梨  
紅色

かり外国の花  
欄とい異なり

檜の花

青  
麥菊の植

替 清明穀雨  
の間なり

梅の若葉

新小生  
葉なり

秦椒若葉

山椒の  
若葉

若蔣

蘘  
荷杵の莖

萍生をむる

茶摘

茶を摘むの時  
候早  
まとき味全  
うら

遅きときハ神散ハ穀雨の前五日を以て上と  
後五日を以て下と終夜露を濡てとるを上と  
日中

四月春

二十二



付 秋の夕暮る

瓢箪の大きき 越人

五石斗たる

猪の

思ひのやりに

子猫て居振う

付

手をひき振をる

やつて嫁のさし

○附句八體

○甘ん。甘場。祝お  
○面影。天象。時宜  
○時分。時節

産た

其人

奇

わささの仙の

飯玉坊の

付

換をりして 杉風

かこ歌をう

續後もの

さしかたがし

又字問う

其場

いあめき瓦座の焚

本之まをり

附句八体

とをを下とれ雨  
中採いより

利茶。白茶  
青葉

種 植 移栽  
種々の草木をうつ  
八十八夜過ぎは時くを下時とれ

種 植 移栽

古今三鳥の傳かどむつりきこあまとも只々  
深山よきをまてもの淋しき鳥とこころ得る

麦ぶら 引残る鶴  
早春の鶴の此頃  
早を残り居るをらふ

雲ふ入る鳥

鳥沖雲とも鳥帰るも同事  
雀雁鳴及もろくの鳥古巢ふ

櫻 魚 櫻

柳 鮎 鮎 鮎  
形柳の葉ふ似ゆるゆ名づく又  
時の景物を賞美の詞とふ

柳 鮎

蠶 飼 蚕 棚  
梁ハ魚をとりの貝たり上り梁ハ  
鮎の上るをわひ下してとるこ

老の鶯

晩春ふありて鶯の  
おいさうとらふ心なり

催

八十八夜 立春の節より八  
十八夜目をらふ

黄

裏山ぎ 青山吹  
以上何まふ  
衣類なり

女服

白アんど白ちの類なり山吹桃櫻の  
類を金銀より箔をさる衣なり

五月

五月 夏

二十三

手始め 旧曆三月一日或ハ三日  
茶摘まをドめ

弥生山 名所  
あが

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥

喚子鳥



日暮

使生長さるなりなるハあつたり

あとな通む夏ハあつたり

時分

あつた

あつた

時節

あつた

あつた

あつた

立夏

穀雨の後

更衣

昔旧曆五月五日より女房上下のびりを

綿

下ケ帯

昔旧曆五月五日より女房上下のびりを

色々不染めて附帯是ハ洞中の御事なり

凡俗も地白さびら下ケ帯をもちふ

加茂の足揃

松本祭

松本村あり祭神平野大明神

菅蒲を獻

菅蒲の輿

早瓜を供

打て同くおこな

菅蒲葺蓬

時宜

時宜

梅

梅

梅

天象

天象

長持

沖

付

使生長さるなりなるハあつたり

あとな通む夏ハあつたり

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

をかくことハ夏ハ毒虫多く生さるふより是を免

かん為あつたり九當時ハあつたり家少なり

端午 端五といハ初五といふが如く月日ハ今年の

天中の節 五日午の刺をす

艾虎ハ艾を以て虎の形を造り或ハ糸をまき小虎

天師を画 端午ノ都人天師を画きこれを賣て

儀方を書 五月五日一寸をり

粽

飾

五月夏

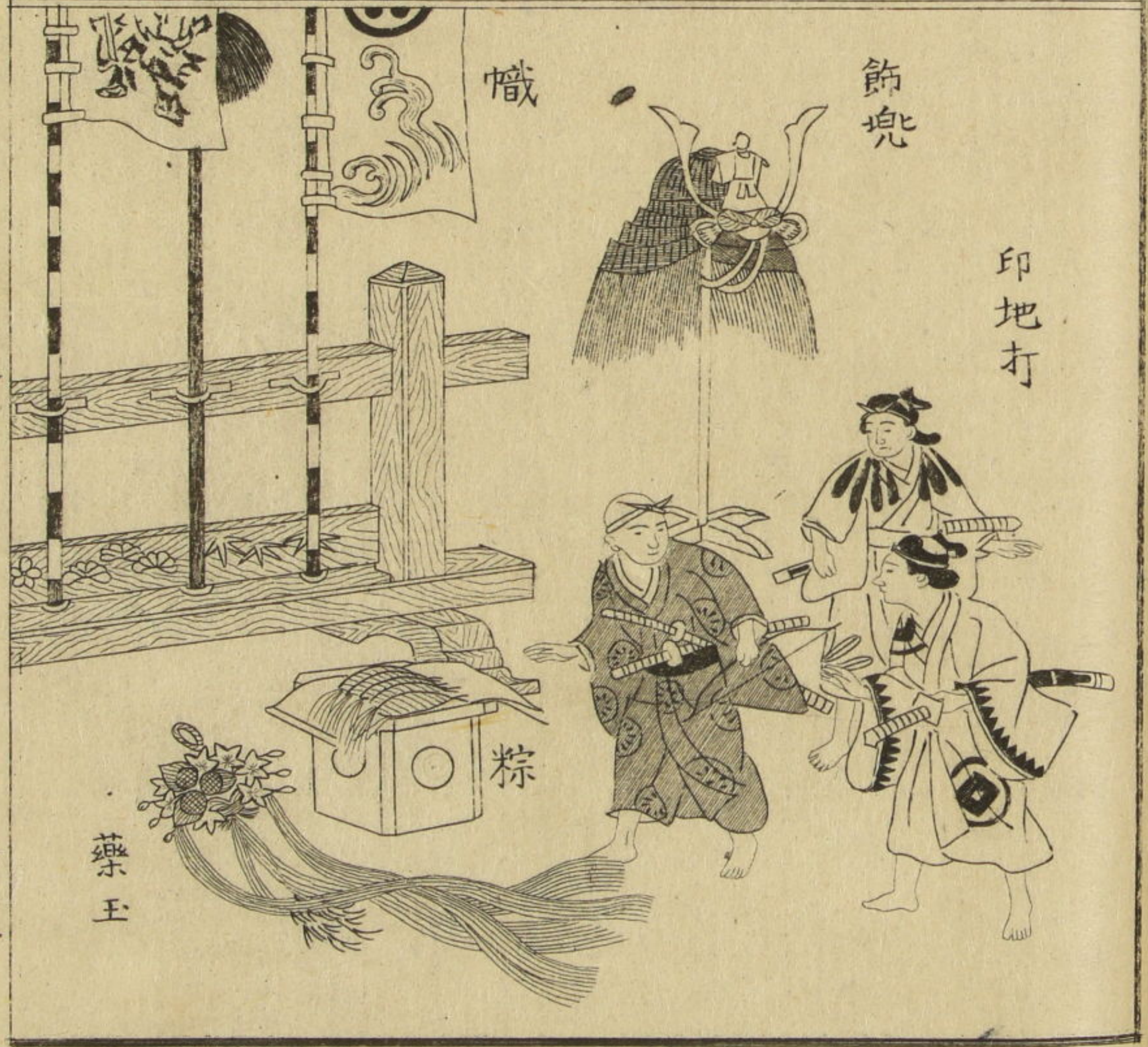
二十四



阿つゝま雲  
 観相  
 大徳の思ひ  
 才いぬと紙のまき  
 取つたまき  
 面影  
 子着ふまき  
 居るまき  
 命

〇重五。重午。端午。端陽。地臘。  
 蒲節。解粽。天中。艾節。朱符。  
 菖蒲引。あやめ苺。沼澤かじり下り。立て引くたり。あやめ鬘。  
 聖武帝の時み初る。菖蒲素。あやめやもたを黒。木の机ふて奉る。  
 菖蒲枕。菖蒲帷子。あやめの浴衣。蘭湯ふ浴。浴衣。  
 菖蒲湯。五日。菖蒲酒。石首を切て酒みひて。是を吞雄黄を。  
 少一むら加へてやんく。一切の邪氣をさく。菖蒲刀。あやめを以て。蒲を以て。  
 菖蒲削掛の甲。あやめを以て。菖蒲削掛の甲。あやめを以て。  
 長き根。菖蒲かゝ永壽六年五月五日あやめ根合。あやめを以て。菖蒲削掛の甲。あやめを以て。  
 幟。古の賊未了早良親王討手として出陣あり。あやめを以て。菖蒲削掛の甲。あやめを以て。  
 親王伏見ふぢの森の社に祈る時不五月五日忽地。あやめを以て。菖蒲削掛の甲。あやめを以て。  
 み海荒きて戦を以て勝つことを得たり此例より。あやめを以て。菖蒲削掛の甲。あやめを以て。

此附方の傳の名目ハ  
 附句ふぬらあな  
 ひとし初學子の解  
 かつこつともあらんり  
 と爰よその一二をい  
 ば其人の附ハあや  
 「あやの亦海を解」を  
 能書をえしとあや  
 のおろきき生ま付あ  
 りとあやめくあや  
 へるものあやめを



五月 夏

二十五

藥玉



まはひひあはまはをこ  
 又其場の附も首白  
 「俤傳走る受物の  
 附」といふ「さや  
 小若月坂の冬の風  
 とおよそのきり行く  
 場跡を附るなり又  
 親相といふハ有たれ  
 常のおも親さる心  
 ナる首白小鏡を  
 嬉しき袖ははみ々  
 だ」といふ「浮きま

つとをぬぬハ換と云  
 るがぬし又面影とは  
 古昔のころ名乗才の  
 人物何よよはそ面  
 影のさあんと思ひ  
 るやうに附るといふ  
 「若心のまめよ越ゆる  
 於鹿山」といふ「由花  
 の頭くそ呼ぶハ誰と  
 附るを見せよ」とい  
 或人一句を得てハ俤  
 を附るといふ証句ま

棟を佩。五日あふちの葉をとりてこまを  
 佩きバ悪氣を逐ふとたり

檮 葺。あやめのこまを軒あや  
 なり今せんぶとら木し

薬草を取り丸散を調  
 合せるふよき日たれを

日とつひてこの日一切  
 の薬草をとらる

鬪。唐の中宗の時安樂公主端午ふ  
 百叫をたたりとら

五月の玉。今日薬草を五色の糸ふて調へ臂ふく  
 じバ悪氣を拂ふとら歌ふ「玉ぬき」

あやめとし  
 よめ

長命縷 壁 繒 五綵絲 朱 索

五色縷 壽 索 條 達 條 脱 印地打

童の小弓を持ちて戯をたれ事騎射より起るたり  
 印地といふぶでの跡の地ふ付て印のごとく成るよ

競 渡。鳧 車。競渡ハ五月五日の  
 水馬。越王句踐の故事

ふ依て起る則舟の  
 りまきくくたを

左近の真手結。左近の馬場  
 したり五月三日左近の荒手結四日ハ右近の荒手結  
 五日ハ左近の真手結六日ハ右近の真手結と云

ひをりの日。三日。是日隨身褌のあしを打て着  
 りハ引折の畧  
 なるべし

粉團を射る。唐の宮中端  
 午毎ハ粉團

角黍を造りてこまをつらあはる者ハ食ふことを  
 得るけし粉團滑みして射る都中盛ふこの

戯をたれ  
 と云々

桃印符 赤灵符。桃ハ西方五本精と云  
 仙木たり能く邪氣

を壓伏して百鬼を制れ今の人門上ハ桃  
 符を打て邪を避るといふこと是なり

鳧の炙。五日。鳧のあつものを作り百官ふくふ又  
 鳧の炙を重んじその悪鳥を以てこ

騎射。馬 弓。五月五日昔ハ豊樂院少て騎  
 射を御覽しとらたり是を

馬弓と  
 神 水。重五の日午の時雨やばき  
 小竹を切へ一竿の中ふさ



















親の氣心

市の便室の

七日

出の字 指合 何れと  
出さる子と 交つたを  
何れに 附向も おも  
出さる子に 何れと 幼くて  
も 十二の 小娘  
出さる 四手の子の 四手  
の 四手 正つてと 付  
ま したる 只その 一字の

○二年 艸。 俱ふ麦の  
○くま 艸。 異名こ

杜宇。 百声鳥。 菟迎鳥。 田哥鳥。 早苗鳥。  
妻恋鳥。 田長。 無常鳥。 夕顔鳥。 妹背鳥。

冥途鳥。 蜀王杜宇の故事。 四手の田長。

九諸鳥皆三指 只不とぎんのと四指ありその樹上  
宿さるとときハ二指前ふ向ひ二指後ふ向ふ四手の  
田長ハ是をもて名く四手を  
死出とたれを非たし

不如歸。 時鳥の啼く  
俱伎羅。 鳥の枕語

謝豹。 虫なり 蓋を以て死さるといふ 虫時鳥の  
ホトギス。 ときけバ則死すと故ふ子規をいひて謝豹

諫鼓鳥 鳩。 時鳥の雌 割葦鳥

鷹の埒入。 鷹初夏羽毛をえんと  
の 内ふ放ち新毛生じて初  
秋のころ 旧のこくこと

飛 蟻。 飛 蟻

遠より 其場の 遠近 男女

長幼の さうひを 見せ

と せし 尤も 終ま 教ふ

る 處

○ 前句を 動して 附と

り 小事あり 是ハ 前句の 句

より 人情又ハ 意の 句を

と どの お付 込

る 所へ 今 一 句 付込 を 変

化 あり 今 一 句 付込 の 変

化 あり 今 一 句 付込 の 変

手つ まつた 今 一 句 付込 の 変

白蟻 俗名 あり

○ 松魚。 堅魚

烏帽子魚。 豆相の海辺 鯉 寸斗形 元が 似て 其色 瑠璃紺 なる 光沢 ありし 流き 来る こと 色を 鯉の 色に 準備 する 魚者 此もの 漂流 する を見て 鯉得る 其の 準備 あり

生節。 鯉の いやと 腫と かり する こと 東都の 俗に なる こと あり

鹿の袋角。 鹿茸。 春落て 後初めて 生る 角 あり

持つかん。 蚕の 蛹。 蚕繭。 眉を作る あり

枝。 蛭。 木の 枝を むむ たり あり

書。 貞。 翡翠。 茄子の花 あり

○ 三夏を 煮る の 部















水えを忘れ

用 水いつをいつ

○附方しも又姿情と  
つふとあま其場甚  
時ふよまへ姿を  
まふときハ情のふ  
て付るまへ只服を  
くくと斗附行くを  
変化たつて人々姿と  
情とハかまへるあま  
た  
あまの極小

富士詣 富士権現を遥拜して富士詣

浅間参 一日。東京浅草駒込本所高田馬場等

忌日の御飯 一日。忌日ハ不浄の

一夜酒 六月會 四日。傳教會。是

御躰の御卜 十日

月次祭 六月十二日。二度諸社へ御幣を

神今食 六月十一日。伊勢大神宮を勧請申させらひ

解齋の御粥 十二日。日の御座の大床まで壘

鳥越祭

祇園祭

長刀鉾

函谷鉾

河原涼

天王祭

祇園臨

土器小和布の御汁物を添へらまへり

九日。東都浅草鳥越町あり祭神天

人皇六十四代四融院天禄元年六月

十四日お始り此祭は鉾十七本を出

。三本鉾等よりその外ハ畧

日曆六月七日より十八日の夜ふりて

京都四条河原のまじりこたまり

元禄のまじり大流疫せしが官ふ乞ひ奉り東

都神田明神の社地を勧請あり所の祇園三社の

神輿を出し街頭を渡御あり奉り

疫を拂ひりといふよ起ま

時祭 十五日。四融院の御宇天延三年六月

十七日始めて行をりといふ

嚴島祭 十五日。藝州佐伯郡宮島あり祭神

三座市村島姫。神田之姫。満

燈籠神酒徳州

たつた徳州

たつた徳州

たつた徳州

たつた徳州

たつた徳州

たつた徳州

たつた徳州

たつた徳州

たつた徳州

たつた徳州

たつた徳州

たつた徳州

たつた徳州

死活

六月 夏

三十五

竹生島祭 十五日。江州湖中ふあり宇

賀神。兎聖武天皇

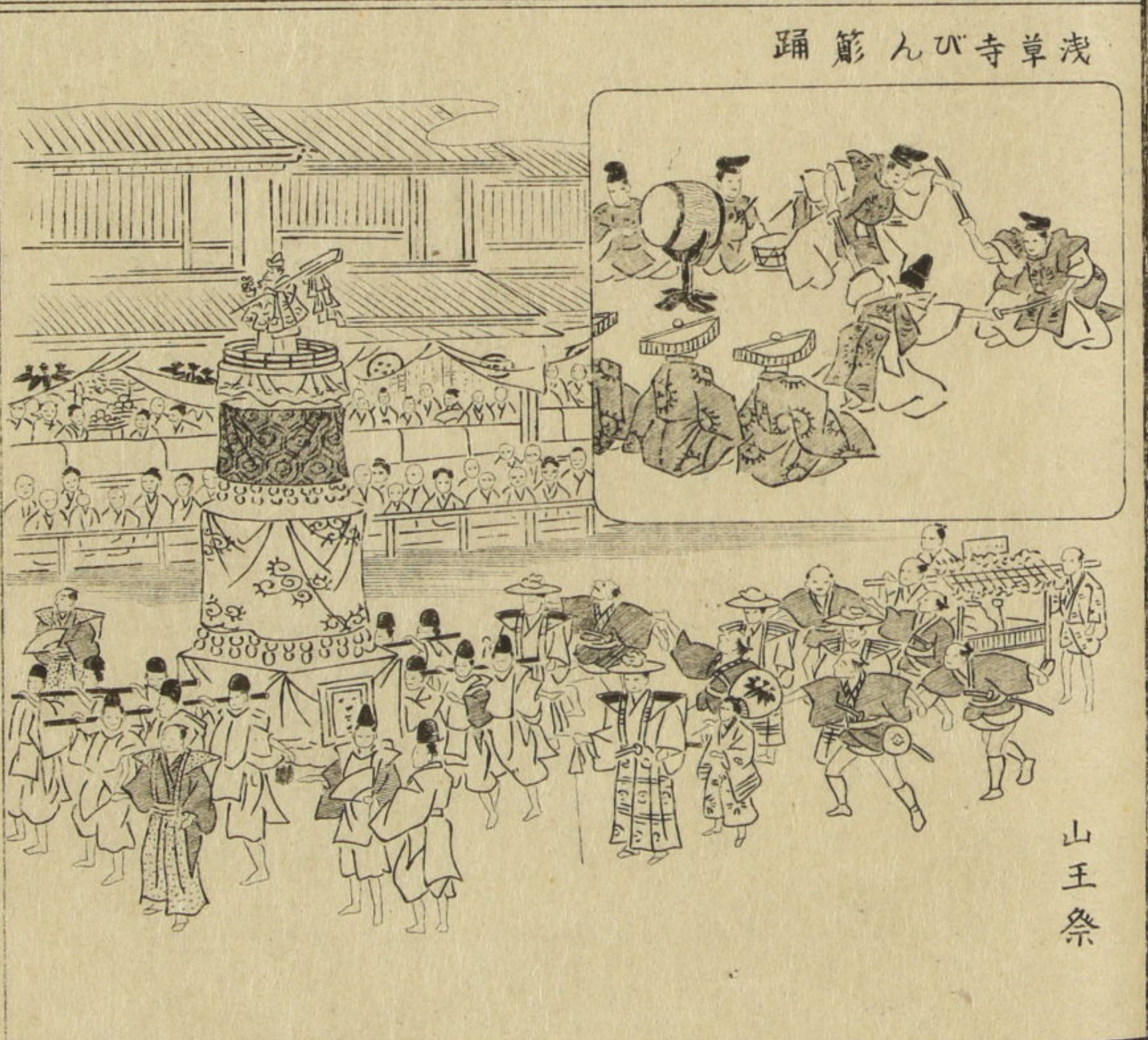


之句ありそは死句よ  
 てちうりあし又虚の  
 句なり人の回へ格を以  
 の理すしこまき実も似  
 する虚ハ云べうくじ  
 となりし「うこの格まで  
 極さるゝ」といふ活  
 句なり又実まをせむ  
 も見る虚し  
 ○自他の合ひあまぬと  
 いふ事附合ハた方  
 手小波の上よてある

物たり壁言を以てしう  
 ありて通るは内儀  
 とらふ他の言句へ借  
 りた疎疾さぬ由ハ物  
 うくし「是自の句な  
 る故あまをばををを  
 浅百もかりのあふ牙  
 ハつらやら」と他乃  
 借人右をば〜又云一  
 句一首の内よハ有ま  
 けまきりハ「詠めや  
 盧山の滝の水澄て

自他

<p>天平三年竹生島 の神現ホとふ</p>	<p>津島祭 十四日。午頭天皇の 十五日。ちりりたふ</p>
<p>尾張国海辺郡門間の庄藤波の里小あを此神始め 西海の對馬ふくり後小尾張の海辺に移る仍て その旧地の名を表し て津島とよふ</p>	<p>芦の神輿。こまき津島にて 毎年芦の神輿</p>
<p>とらふことあり国中の 疫疾変異ホをとり の里小あを祭 神五座たり</p>	<p>熱田祭。神社尾張国年魚郡 江崎松島千電</p>
<p>赤坂永田馬場小あを東都第一の大社ホ〜 祭のわりもの笠鉾等出る所百廿余町あり</p>	<p>東都山王祭。十五日。神社 東都</p>
<p>氷川祭。東都赤坂小あり風土記小六の宮とよ 祭神素盞鳴尊、奇稲田姫云々</p>	<p>浅草寺びんさくら踊。十五日。東京金龍山 浅草寺に於</p>
<p>と今日びん箒おどろけを くち甚古雅な踊をり</p>	<p>かつ。嘉定錢</p>
<p>嘉永喰。うらうら嘉定通宝の略わりとむ又六月 十六日の嘉定ハの錢の銘小嘉定通</p>	



浅草寺びんさくら踊

山王祭

六月 夏

三十六



「法ハヤミク野老城」  
 「人」とも「人」を前句  
 「廬山の滝の」とも「水  
 でハミ流」を前句「水  
 すまて」ハ「こた」を「法  
 の句ハ目」とも「極」  
 人」とも「他」を「そ」  
 かや「ハ」何「す」  
 たる「又」他門「は」  
 の自他を「ハ」  
 て自「と」つ「け」  
 附他「と」来「ま」

宝とあまの勝とり名詮を  
 賞翫せんくわんのせんもせん也  
 相國寺懺法せんぼう 十六日  
 洛の相國寺閣上せんぼうに於てせん法を修せんり世に閣せんに  
 懺法所せんぼうとす。松風の鉦。小孤の鏡せん當寺の珍せん宝  
 たり此寺  
 禪宗ぜんじゆうなり  
 伊勢祭礼いせさいらい 十六日。外宮の  
 十七日。御祭礼みまつらい  
 十五日。博田櫛田の神ハ筑前国那珂郡なかくあり  
 祭神中殿ハ櫛田姫命右殿ハ祇園  
 午頭天王左殿ハ天  
 照大神宮勸請云々  
 志渡寺しわたら 十五日  
 淡州寒河郡補陀ふた山清光院志渡寺本尊ハ  
 十一面觀音じゅういちめんくわんおんの御作みまなり  
 西園寺殿妙音講さいおんじ 十六日或ハ。西園寺家妙  
 十七日。音講おんかうを修しゆせり  
 妙音を弁  
 財天さいてん女になり  
 て納涼會なつりゆうかいを行ふ  
 こを涼すずとす  
 寺てらあり竹切たけぎりとす。数千の竹を衆徒しゆうだきりて天を  
 祀まつることまじ毒蛇退治どくだせしむるの法ほなりとす  
 座頭の涼ざだうのすず 十九日。盲人清聚  
 殿だん會かいり  
 鞍馬の竹切あまのたけぎり 二十日。洛外  
 鞍馬あま

たとも教まを二句の  
 尚能考へお越の妻  
 化よく前句へのふさ  
 一よくハ自とも他とも  
 勝かちに次第しだいふたも  
 可か然ぜんり  
 句作くせをてたもた切  
 みるんべーみるんべーの時  
 能よ活よる前句ハ水仙  
 ふふとと雪の縁帽  
 子ことらふ句へ「毎冬を  
 禁城きんじやうの門」と付

御手洗詣ごてせんぎ 十九日より。加茂の御社  
 三十日ハ。おありなり  
 糺ただの納り  
 涼すず 山城国愛宕郡あきたかあり糺ただ或ハ只洲しゆうに作しる是を  
 糺ただの宮みやとす蓋地名かより是を称なす  
 上難波の御枝かみなんばのみえ 摂州大阪高津の宮みやあり此社ハ  
 生玉なまたまの北きたあり祭神比賣ひめ古  
 曾神そがみ本名ほんなハ下  
 照姫てらひめなり  
 郡ぐんより太神宮たいかみみやふて氏  
 子の市民しやみんへおくさる  
 丹波国素田郡水雄みづおの北きたあり祭まつる神伊弉いさ並尊ならみ  
 火産靈ひのうらみ尊のみことなり此日参詣さんぎすまハ千度せんどふたる  
 橋立祭はしだてさい 廿五日。丹後国与佐郡速石はやしの  
 里さとあり里中さとちゆうハ長ながき  
 大寄おほよあり是を天の橋立はしだてとす又大名を  
 久志くし瀨せありはハ久志の渡わたと名なづく  
 天満てんまんの  
 御枝みえ 廿五日。摂州大阪天満天神  
 のみみととざざなり  
 住吉すまぎの  
 御枝みえ 廿九日又  
 三十日  
 加茂水無月能かみみづなづき 六月三十日  
 夜上加茂

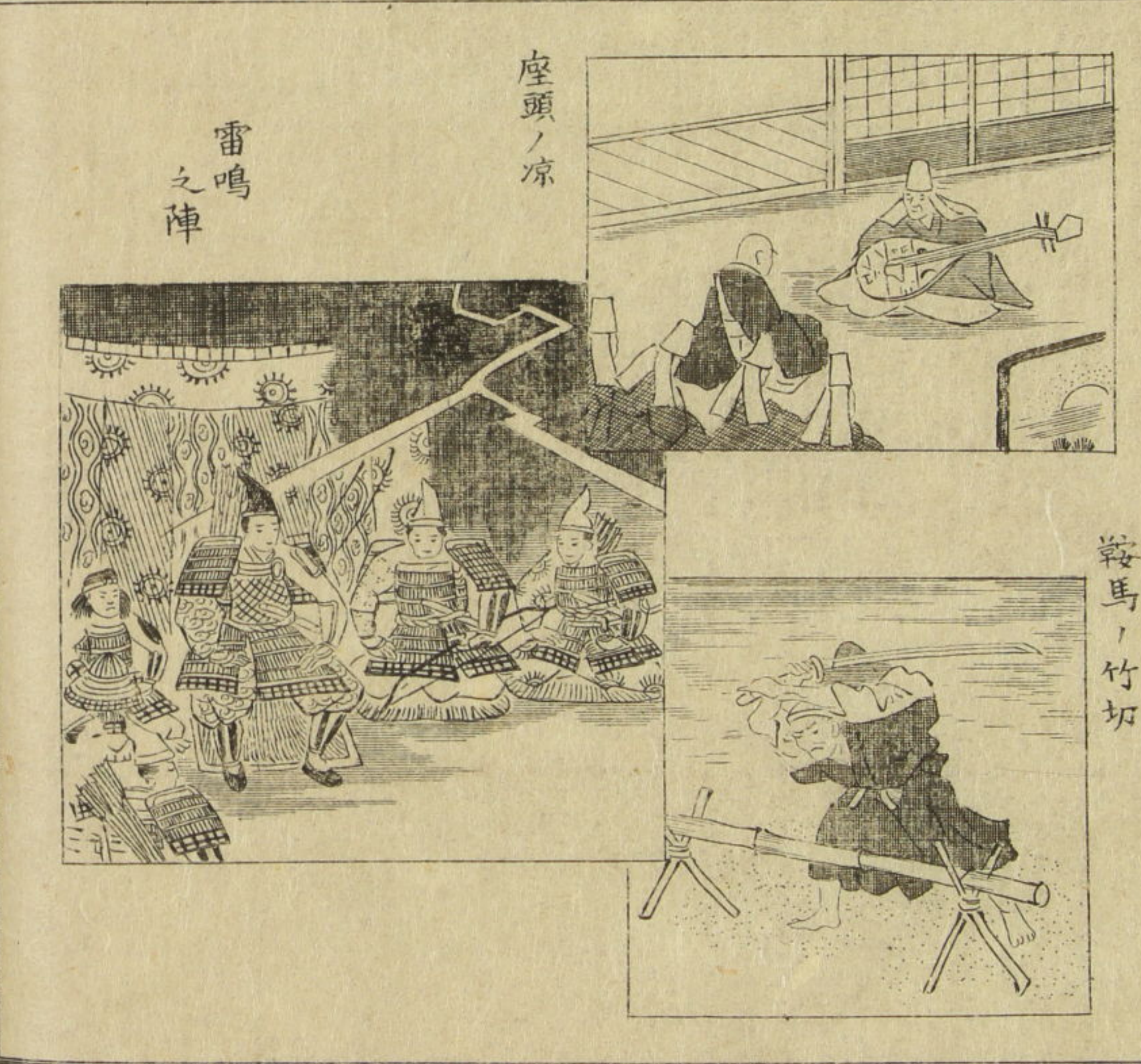
句作

六月夏

三十七



たまふあふ人云先ん  
可なりさひむの句ハ一  
二字のうちに新ら  
しみ又面白く出末  
るものやを「算火照  
らけ増澄の内」として  
照の一字も楽をい  
はすものやその意色  
行列等の宮体も  
又へ流るやうなりし  
申されし



せぬことなるを其一句の  
傷もいさふまゝハあ句  
への兼ともあるのなる  
たしむを以ていとまぬ  
やうよ兼を結ぶと  
肝要なり征句もを  
あゝねよ「何印を  
白熊の尾花を」と  
ことらるる是の句の  
働もいさふまゝのもの  
其外婚禮新宮様  
後首途出立法祝

<p>の神事音楽あり乃ち 枝を修り云々</p>	<p>名越の枝。荒和の枝。名越 夏を越すの略みして火討金 と刺すも枝ふよりなり</p>
<p>兼を切て幣と枝 さる川は流る</p>	<p>唐崎祭 三十日。近江国唐崎 大明神の祭</p>
<p>節折。昔六月を竹みて主上の内たけの寸法 をとりて其程ふ折あしぐバトをとりとらふ</p>	<p>大枝 三十日。百 官</p>
<p>悉く朱雀門みらり かりし枝をい</p>	<p>茅の輪。午頭天王の志め うたふ遺風疫癘も</p>
<p>やも時こまをかくきバ災難をのこ かりとの輪ちうやよを作らる</p>	<p>菅貫</p>
<p>茅の輪と同物なり茅菅 を以てつら故の名なり</p>	<p>形代。御枝す み入形を</p>
<p>作りてそまを撫て身の 災難を枝ひ川み流る</p>	<p>夏神楽川社</p>
<p>川辺み棚を構へて神事 祭り夏枝とらふなり</p>	<p>夏枝夕枝</p>

六月 夏

三十八



義又ハ追悼追善ハ別ニ傍受あるもの席よりて扱ひ又ハ忌詞など心づいあさる

杉風臨同抄まふ俳諧をまふハ不用と不用と虚と実と前後の程をこそまへ世法のお節を扱ふを要とまべし

み云程の遺状ハ杉風ハ中略法風雅ハ幼老及のう紫とら本小ハ勸り又その前後をまよとのま言たるんとや下略

○前ハ七名ハ俸を顯し次ハ子あ句の見定中ハ前句を轉動して附くとい是皆俳諧の必用の要

**御枝川鎮火祭** 三十日。卜部氏の人火を打く宮城の四方の隅にて祭るなり火災をふせぐんが為なり

**道饗祭** 三十日。こきも都の魁の他より来るを入まきん為小路上ハ供物を備へ祭る

**小蠅を以神** 蠅のこきも悪邪多きを日本紀み出づこきも夏の邪熱をこきも

**施米** 東山西山ハたどふあまき法師をらよ米益を施さるこきも

**雷鳴の陣** 昔ハこきもりの声三度高くをまバ大将以下近衛の次将ヲ弓矢を帯して却殿の孫廂ハ侯して天子を守護し奉る

**大山参** 六月廿八日近国州大山石尊大権現へ参詣をこきも初山といふ又盆中ハ登るを盆山といふ

**五月雨** 蕨雨。旧曆五月ハ梅雨のころぬものちり故ふこきも五月雨クタルの略

**入梅** 墜栗花

立夏の後庚乃日逢ふを以て入梅と芒種の後壬の日逢ふを以て出梅と

**五月晴** 五月闇白ちへ黒ちへ。白ちへハ入梅のちり又晴るるき又晴るるき

**半夏生** 旧曆五月中より十一日を期して竹の子を喰はる是竹節虫を生ずるの故なり

**蟬の初声** 鶯音を入 反舌無声。礼記の疏ハ反舌迂が花。古代よりびらの染色とら一説ハつと進の字假名とらつとと書るべし

**惟** 和名 加太比良 羅 若竹。今年竹 夕玉艸

**河玉草** 供み若竹の異名なり

**篔竹** 細長く節ひまきして



〇変化の事杉風流抄  
 抄云云大を之を天  
 地小とらるる今を盡  
 衰の变化たる変化  
 ハ天地の宜規なり

直ちり矢 竹を用ゆ ゆ名業 平とらふ	業平竹 雄竹のこくして節ハ雌竹 似たり女竹男竹のちちかとき	苗 。早苗。早苗取。若苗 。田植。玉苗	早少女
。植女。田植哥 。田植笠	棟の花 棟或ハ樽み作又 雲見州とらみ苦棟	。神の花 万葉ハ神樹小作 誤て神とら神ハ俗	楓の俗誤てらふ 梅檀たり
字を	山梔の花 。木丹 。越桃	石榴の	
花 。石楠ハ三種あり。本紅千葉。白千葉 。黄色千葉。近世又桃色あり	栗の花 花上半ハ白く下半ハ紅なり 葉ハ緑にて夜ハ合さぬ	天南星 一名虎掌 和名松ヤ	五月躑躅 杜鵑花とくをさるまき いとよきむまきと斗

不空と思ふは遠く  
 塵々中助さまは  
 能潜るの古今乃変化  
 化あり一毫の变化  
 あり附合の变化一  
 向の厚ん化百多不  
 色よるをり流りす  
 りとて又よあや或ハ  
 虚不実よ去来今  
 年よ不替も志も  
 目どらるるをりもく  
 空の空は流るる流るる

今ハいふたり此花種類多しその内八木とを賞はる もの。松しま。さらま紅。さの雪 。神楽岡。小つをき。まら白 。人丸等たり	南天の
花 。南天燭。南燭。男梳。染菽 。揚烟。牛筋。かむの名あり此花 の汁をとって米ハ債鳥飯として食へを健 かすこと牛筋のこけ故ハ牛筋の名あり	未央柳 その葉柳ハ似て梅 雨のころ黄花ひく
忍冬の花 冬を凌ぎて周まき 故ハ忍冬の名あり	金銀花
是も忍冬の花 のことなり	
麦 。たをこ。單弁 け千弁をものを洛陽花	
大和撫子 紅梅花	唐なをて。種々品 あり
鷺撫子 花の形より	藤なをて。是色ハ よりて

変化

六月夏

四十



せうきばん葉ををま  
 育せは五味和せられ  
 を人を巻ふる餅  
 俗人の行事も俗  
 あるを風流せは  
 知ること難し左傳  
 小雅の晏子の和と  
 同との物言あり俳  
 諧の变化もわぬぬ  
 一よまのの後ハま  
 里と抄はべし作  
 ひさすよ变化す

乃とといふまの  
 られとぞ

俳諧心得終

の名なり  
**川原撫子**  
 撫子と同物なりさきハ萬葉  
 にも石竹ををるることよめ也  
**石竹** 今二種と

とやう草よとき草。この異名なり  
**女貞**

貞木。鼠もちの花細く白き花開く葉ハ椿ふ  
 似てきさなりゆ名ハ姫椿又やふつバ

きと  
**薔樹** 白花開く葉女貞ふ  
 似て薄く光りあり

**百合**。強瞿  
**車百合**。花ひら車のそのこと  
 大和より出。赤色なりとぞ

**透百合**。奥州より  
 出たなり

鹿の子ゆり  
**博多百合**  
 山丹。百合ふ似て葉も小なり  
 葉ハ柳ふ似たり花あり

花の大小  
**袂百合**。こまハ深山溪谷の間ふ生さ甚  
 小なりと名く

一株を決ふ入まて又まかり  
 上故ハ袂百合と名けし

**紫陽花** 一名四葩  
**紅の花**。紅藍花  
 未摘花

**下毛の**  
**酢漿草**

花。木少くして花の色真紅たり淡紅  
 ありて美しく葉ハすけは似たり

の花。酸母。片葉三ツあり故  
**夏菊**。この頃より  
 花咲きて

秋ふ至る殊な香  
**萱草**の花。護草ハ合歡  
 氣かたさのなり

して憂を忘ましむ又懐妊の婦人の葉を帯る  
 ときハ男子を生むとらふゆ名ハ萱草の名あり

**鏡線の花**。花譜及び三才図會にも纏枝牡丹  
 を載せしこま鉄線花と云ふ

子説  
**胡露草**。一名銀錢花と云ふ花の形楮ふ  
 あり

尺斗枝あり朝ふひ  
**蚊帳釣草**。おまの葉ふ似て

其くまこ  
**天門冬**花。和名まゆらぐさ。一名くさ  
 へらとあり

六月夏  
 四十一







但し百文の二の一折板と  
るを七廿二句とてろふべし

○四十四候の式

- 表 八句 七句の月
- 裏 十四句 九句の月
- 二表 十四句 十三句の月
- 二裏 八句 七句の月

○源氏の式

- 表 六句 五句の月
- 裏 十二句 七句の月
- 二表 十二句 十一句の月

右二折 月三

但し百文の初折と名残  
の二折を四十四なり

花をくしを  
天仙果。紀州山中あり花  
をくして実を結ぶ

枇杷。似て小き  
枇杷。桑實。正字  
枇杷。正字  
枇杷。正字

薑。生胡桃。早松茸。此月不出  
早松茸。此月不出

瓜の花。諸瓜を  
早瓜。浅瓜  
早瓜。浅瓜

瓜。枕草紙。瓜。黄瓜。姫瓜。色白く甘  
瓜。枕草紙。瓜。黄瓜。姫瓜。色白く甘

種。時移。栽。菊。椿。梨  
種。時移。栽。菊。椿。梨

射。火串。是ハ夜深く夏山の  
射。火串。是ハ夜深く夏山の

鹿の子。鹿弾。魚藻打  
鹿の子。鹿弾。魚藻打

魚藻。川中木を打て綱  
魚藻。川中木を打て綱

浮。巢。鳥のうき  
浮。巢。鳥のうき

此頃諸鳥の毛を  
此頃諸鳥の毛を

鬼の子。俗鴨と誤なり  
鬼の子。俗鴨と誤なり

鳴。鳴。初。俗小百舌鳥を  
鳴。鳴。初。俗小百舌鳥を

芝原。巢。くふ  
芝原。巢。くふ

打。磬。蟬。空蟬と書く  
打。磬。蟬。空蟬と書く

東都。芝浦。小あり  
東都。芝浦。小あり

夏。日。夕。獵。の。鱒。子  
夏。日。夕。獵。の。鱒。子

水。馬。鯉。賣。鼓。虫。是。も。水。す  
水。馬。鯉。賣。鼓。虫。是。も。水。す

- 二裏 十二句 七句の月
- 名残表 十二句 十一句の月
- 名残裏 六句 五句の月
- 右三折 月五 花三
- 米字の式
- 表 八句 七句の月
- 裏 十二句 七句の月
- 二表 十二句 十一句の月
- 二裏 十二句 初裏 一月
- 三表 十二句 二表 一月
- 三裏 十二句 二裏 一月
- 名残表 十二句 三表 一月

六月夏



同裏八句 七句め月

右四折 月七 花四

○易の式

表八句 七句め月

裏十二句 七句め月 十一句め花

二表十二句 十一句め月

二裏十二句 初裏二句

名残裏 二表二句

月裏八句 七句め花

右三折 月五 花三

○十八公の式

表十句 九句め月

蛇衣を脱く。蛇脱時なくとも只不浄を着  
脱き即脱け或ハ大みあく時ハまて

脱き

七月

○大月。○觀月。○七月。○夷則月。○小暑。夏至の後十五日斗

一ふさげ 大暑。小暑後十五日斗末に  
建辰を大暑とす

餓鬼。此月一日より十五日まで寺院  
の例ふよりて修とす

燈籠。玉菊追善のこころハ諸人の  
知ることゆるん之を畧す

六日ふふ雨をりふ 北野御手水 六日。山城国  
又七夕の車を洗とも云 葛野郡

北野天満宮ふあを七月六日松梅院御手水を神  
前ふ供り松風の硯ふ穀の葉を添てを供り

机あらひ硯洗ひ。六日ふ兒童硯机をあらひ清め  
羊の葉の露をとり梶の葉ふ

七夕の手向の詩歌 七日節供。今日内膳司より  
をりき供り

裏八句 七句 花

右一折 月一 花一

○五十韻の式

右八百韻の二ノ裏ヤと  
七十二候五十員四十四候い  
づも月花の定座百員と  
同ト

右二折 月四 花二

○長歌の式

表八句 七句め月

裏十六句 九句め月 十五句め花

名残表六句 十五句め月

名残裏八句 七句め月

右二折 月三 花二

七夕	七夕	牽牛織女。一年一會昏宵の今節に 故ふ七夕とふ當時祭らぬ家多し	二星
七夕	七夕	牽牛星。織女。二星の名を 畧せしむ	二星
七夕	七夕	河鼓。いさむ星	二星
七夕	七夕	めなあぶ。俗ハ雙星 とふ是し	二星
七夕	七夕	さうのれ姫	二星
七夕	七夕	百子姫	二星
七夕	七夕	絲織姫	二星
七夕	七夕	朝名姫	二星
七夕	七夕	梶の葉姫。以上たなびと 七姫の名なり	二星
七夕	七夕	とらふあや	二星
七夕	七夕	とらふあや	二星
七夕	七夕	星合彦	二星
七夕	七夕	星星あり	二星
七夕	七夕	星の手向	二星
七夕	七夕	七夕つめ。とらふあやと妻とらふあや 或ハ七夕女とらふあや	二星
七夕	七夕	天の川	二星
七夕	七夕	銀河	二星
七夕	七夕	曬衣夕巧	二星
七夕	七夕	乞願夕乞巧奠	二星

七月 夏

四十四



○短歌の式

表 四 句 月を

裏 八 句 初句の月  
七句の月

二表 八 句 七句の月

二裏 四 句 三句の月

右 二折 月二  
花二

長秋短行詩行も花  
坊考考作る詩とらふ

○箴の式

表 六 句 五句の月

裏 六 句 五句の月

但し又表六句の裏六句  
のりて二句のりたる

○首尾

女の手業の器用なる  
やうふ乞ひのりなり

鵲の橋。世人の知ることゆゑ  
種々説あるも略し

年のわたり。年ふ一度天の川  
を渡りて心なり

を祭る殿閣  
高樓をり

きて星のゆげ  
をりてをり

手向るを  
よふ

の上の蜘蛛の巣を引  
とまば巧を得るとい

七夕ふ借。惣して七夕ふ供する物をとらふ  
中ふも色なき衣をりて渡りて二色を

手向る

親族さめめんを送り  
互ふ食するなり

鵲。うららの  
類なり

紅葉橋。是し誠ふ  
あふりて

星の屋形。此日貴  
人の星

七箇の地。百箇の地ともい  
七つの盥ふ水をい

乞巧艸。婦人七孔の針小色々  
の糸をとらして七夕ふ

庭の立琴。こまも星ふ  
手向る

七種の

秋さう衣。彦星の着て  
別る衣なり

表 六 句 五句の月

裏 六 句 五句の月

○三ツ物

發句。照。第三

○千句

百 韻 十卷なり

發 句 四季小はし

春 三 句 夏 二 句

秋 三 句 冬 二 句

去嫌句数

同 季 四季とも五  
句去なり

春 秋 三句より五句まで  
二句より三句まで捨てる

去嫌句数

左小舟妻迎船。織女がえぎうをむ  
ひふ出るといふ心なり

船。いろくの室を七品  
積て手向るを云

梶の葉。七夕ふハ七枚のあぢの葉ふ手向の歌をり  
き五色の糸ふちきて屋の上ふりて

物なりよ。短冊竹賣。今の俗星ふ手向るとして五色  
の紙を剪りて短冊とす

笹の葉小結ふもの。竿の葉の露。飛鳥井

の鞠。七夕の日飛鳥井難波  
の家蹴鞠の會り恒例

東西の門跡の未派并ふ家礼花数種を以て船の形を  
造り又櫓の形を作り其中へ種々の草花を立て

門主ふ。逆の峯入。七日。大峯と称するハ即全  
峯山なり宗派は本山

当山の別あり峯入ハ即今日みて聖護院  
の宮なり是を逆の峯入といふなり

八日。仁明天皇の御宇より  
東寺西寺にて行はる

六道参。九日。迎鐘

七月。夏

四十五



夏冬

一句より三句まで  
三句を捨てる

戀

二句より五句まで  
一句まで捨てては四  
季まで恋句等ハ折端を出  
さずあけ句は二句始めて出さず  
但し五句  
去たると

神祇

一句より三句まで  
三句より多くせは  
二句去

釋教

神祇と同ト  
三句去  
三句去  
三句去

述懷

三句去  
三句去  
三句去  
三句去

無常

一句より三句まで  
引合てハ三句は  
無常斗も三句ハつらねは  
斗も三句ハつらねは  
あ

山類

一句より三句まで  
三句迄は長く。三句去  
山はも同ト

水辺

二句より三句まで  
三句去

人倫

二句より三句まで  
三句去

居所

一句より三句まで  
三句去

主類

二句より三句まで  
三句去

植物

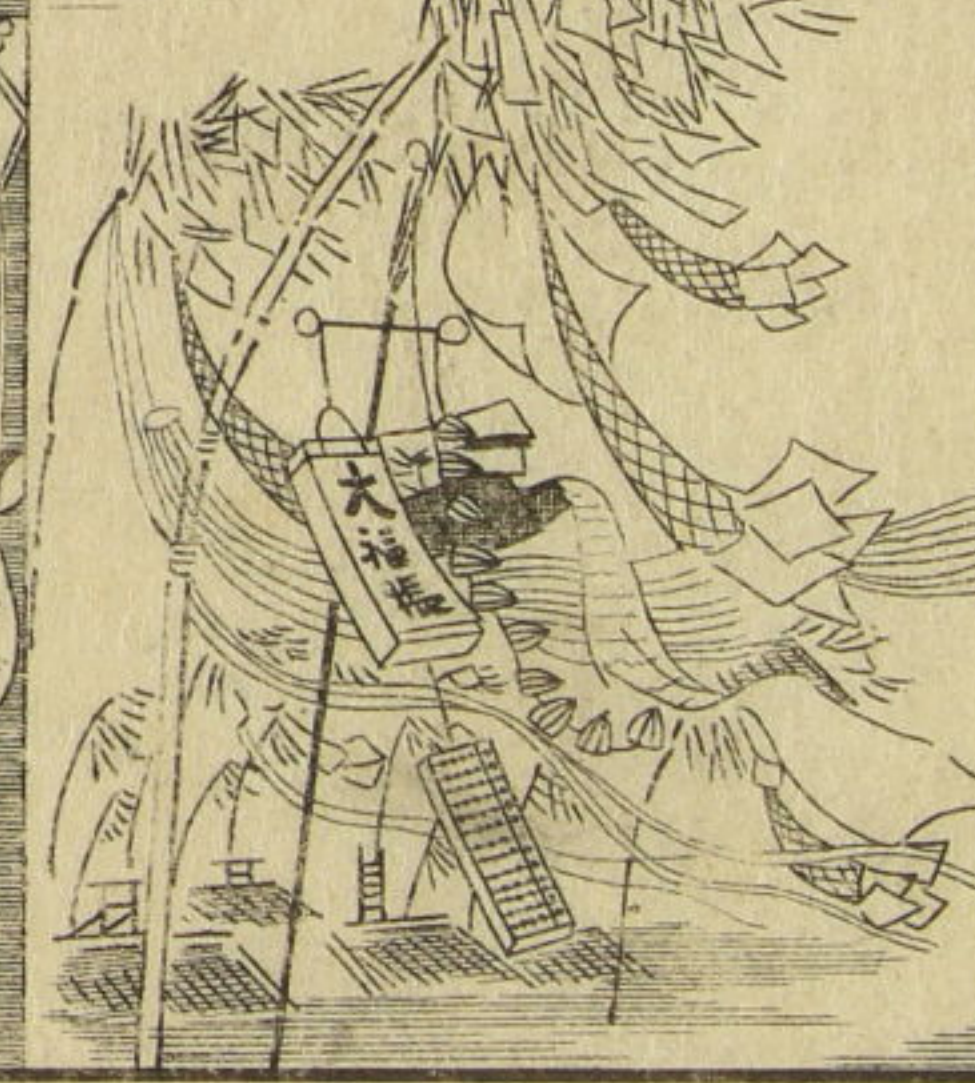
一句より三句まで  
三句去

旅

一句より三句まで  
三句去

衣類

二句より多くせは  
衣の字五句去油



五条の末北建仁寺の南にある六道の  
珍皇寺より山寺へ参るをりふたり  
諸人の六道へ参り模の枝を買ひ家へ帰り  
前ふね 俗聖霊模の葉は乗りて来る  
清水千日詣 十日。今日参詣をきば  
千度お当り  
浅草四万六千日詣 七月九日より十日  
参詣羣集むむむ  
俗こまを四万  
六千日とりふ  
王子権現祭 十三日。神社  
武州  
熊野三社権現祭り  
燈籠踊。伊勢木どり  
木をたどり。小町木どり  
往古より今もたぐんげ  
撮待。門茶。往来の人お湯  
茶を施す  
踊躍。念仏をり  
題目踊  
高灯笼。切籠灯笼。船とらうらう。花灯笼  
舞灯笼。揚とらうらう。影とらうらう。折うけ灯  
籠。廻りとらうらう。民俗仙事をかた月をれハハ  
軒のとらうらう。小供とらうらう設るなり

七月夏  
十月夏



名所	三勺去 二勺より多くせだ 二勺去り
國名	二勺もつく二勺去 三勺もつく二勺去 て捨る。三勺去 二勺去二勺より多 くせだ雪雨露と なり
夜分	二勺より多くかつ うた二勺去 三勺より多くかつ うた二勺去
降物	三勺より多くかつ うた二勺去
天象	三勺より多くかつ うた二勺去
箕耳物	三勺より多くかつ うた二勺去
去嫌	三勺より多くかつ うた二勺去
月	三勺より多くかつ うた二勺去
淚	三勺より多くかつ うた二勺去

盆前	草市	盆市
菟迎	燒き火	盂蘭盆
聖靈祭	張り先人の位牌を列ぬえ を菟棚とも聖靈棚ともよ	生御霊
荷の飯	刺鯖	墓
中元	八幡安居頭	三井寺女詣
	夏解草	夏書納
	善福寺童相撲	水灯會

命	折を嫌ふ物
岩	妹脊
妹	妹脊
鳩鳥	鳩鳥
鶴	鶴の林
馬駒	馬駒
靨	靨
行末	行末

盆前	草市	盆市
菟迎	燒き火	盂蘭盆
聖靈祭	張り先人の位牌を列ぬえ を菟棚とも聖靈棚ともよ	生御霊
荷の飯	刺鯖	墓
中元	八幡安居頭	三井寺女詣
	夏解草	夏書納
	善福寺童相撲	水灯會

去嫌

七月頭

四十七







○朱の玉がまき。千代の古垣。○  
 若の玉がまき。若の玉垣。○  
 のこむ ○片そぎ。千代の  
 駒犬 ○拜殿。御供殿  
 ○称宜。神主。社人。○  
 守。官人。市販。○  
 ○社務。神子。社務。  
 ○長官。○  
 ○御けり。ひ。御抜。夏  
 ○御注連川。○  
 ○神樂。○  
 ○神輿。○

初伏と一四の庚を中伏と一立秋後初の庚  
 を末伏と一候ことと三伏と一ふたり  
 土 用土用干。出拂ひ  
 類。涼。露涼。風薫る。青東風  
 青のら。夏木立の梢の緑を  
 日盛のそら。雲の峰の  
 日やけ。日。金。浚井。曝井。井戸  
 納涼。川原をい。川す。川す  
 波中。清水。泉。清水結。清水  
 掛香。薰衣香。匂ひ袋  
 合。萬鬼行。後漢の時伏日ハ鬼出ると  
 書門戸を閉ぢ或ハ湯餅を

○祭。神。○  
 ○柗。○  
 ○幣。○  
 ○宣。○  
 ○拍掌。○  
 ○御。○  
 ○火焼。○  
 ○文。○  
 ○打火。○  
 ○三寸。○  
 ○矢。○

作りて辟鬼と名  
 竹の籠をり。或ハ足をせち  
 川。狩。持。投。鯖。釣。海月取  
 海母取。鷓鴣。鷹。練雲雀。竹婦人。抱籠  
 雛。蝶。空。蟬。燈。蛾。蟬の脱。蚊  
 蟬の諸聲。鳴く。残。蠅。秋ハ虫の多き中

初月の言

七月夏

四十九



○岩船○穗屋作○神  
 ねろく○舟玉○釜を  
 らへ○常陸帯○東遊  
 ○乙女子○俚勢講○  
 ○初午○小忌衣○庫  
 申待○月待○日待ち  
 ○遷宮  
 ○非神祇の詞  
 元方○年徳○男山○  
 佐保姫○竜田姫○橋  
 姫○龍神○竜宮○放  
 生川○熱○山伏○神

昔より夏ふ出 あつちやせ	蠅 。蚊 。蟻 。蝸 。又糞土の中 もも生に	金亀子 。蛟 。蟻 。金	鳥毛虫
三度田草を取る 一番草二番草とらふ	青田 。根掘虫 。ふ生ず	百日紅 。紫薇花 。猿滑と	竹の皮
いふやハ皮たあふふ ことと得ゆふふ名づく こととらふ	烏扇 。射干 。本草は射 干を同物	荷葉 。蓮の葉 。浮葉を藕	池見草
とせり然まども花の形 ちぢり射干たより莖短く 葉扇のてくたふひる	慈姑 。燕尾草 。形燕の尾 ふ似し	菱の花 。白鶴山と いふ大なる	馬鞭草 。花ふら白ふして穂の てし一名をうづら
ものひらふ ぎたより	猫児 。沢漆 。このくさ 形蠟臺	河骨 。萍 。蓮草	釣鐘草 。高さ一尺半り形弁 慶草ふ似た
水花。風露郎 かきしつへり	虎の尾草 。花白く虎の 尾ふ似し	書顔 。鼓子花	夕顔 。壺盧 。ひきこの花たう 白き花咲く
つりもの如し又 白花淡紫の花あり	麒麟草 。高草一尺半り形弁 慶草ふ似た	新干瓢土用中ふ むきてはすん	苦瓠 。瓢草 。夕顔と一 類して

○上巳の菰  
 ○釋教の詞  
 佛教。木像。立像。本  
 元祖。開山。座像。給像  
 院家。國師。僧祿  
 禪師。律師。長老  
 上人。和尚。西堂  
 東堂。首座。藏主  
 典主。書記。行堂  
 僧正。僧都。法印  
 法眼。法橋。阿闍梨  
 ○檢校。法師。法体

新干瓢土用中ふ むきてはすん	苦瓠 。瓢草 。夕顔と一 類して
味甘きゆる苦瓠 と名づく形ソク あるが	夕顔 。壺盧 。ひきこの花たう 白き花咲く
つりもの如し又 白花淡紫の花あり	麒麟草 。高草一尺半り形弁 慶草ふ似た
つりもの如し又 白花淡紫の花あり	書顔 。鼓子花
つりもの如し又 白花淡紫の花あり	虎の尾草 。花白く虎の 尾ふ似し
つりもの如し又 白花淡紫の花あり	書顔 。鼓子花
つりもの如し又 白花淡紫の花あり	書顔 。鼓子花
つりもの如し又 白花淡紫の花あり	書顔 。鼓子花
つりもの如し又 白花淡紫の花あり	書顔 。鼓子花
つりもの如し又 白花淡紫の花あり	書顔 。鼓子花

釈教の詞

七月夏

五十



○禅門○入道○發心  
 ○新發意○坊宮○比丘  
 ○比丘居○丘○坊主  
 ○坊○房○宿坊○碩  
 ○學○僧○老僧○若僧  
 ○美僧○小僧○貧僧  
 ○客僧○薦僧○出家  
 ○沙門○業門○釋氏  
 ○沙弥○寺○律寺○奧寺  
 ○禪寺○山寺○里寺○寺  
 ○内○念仙寺○三井寺○清  
 ○見寺○和源寺○難波寺  
 ○塔中○願寺○寺家  
 ○堂○後堂○古堂○惣  
 ○堂○後堂○古堂○惣  
 ○護大寺○天加寺○羅漢  
 ○堂○海陀寺

別種かを味 ふがし	名付く故 凌宵の花	高陸花 花白赤あせ白花の もの根もあらし	解毒丸 不用中	水草 正字地 錦なり。花、黄心	蘿摩 花紫白色なり秋実を生むへち中の如 きものこころし採綿ふくへもち中	蒲の穂 穂の形銚小似たり 故小蒲銚とよ	黄實 花紫なり花の下 ふ実なりび生れ	虎鬚草 燈心草 季ふハ多く 碧玉草 四月とれ	土用ふ入て菊の置の表ふ 用るハ備後を上品とれ
風蘭 桂蘭 仙仲 を好こ	凌宵の花 紫 時 夏より秋まで 花ひらく	山慈姑 俗黒く日お とらふ花	鷺草 花白く鷺 小似たり	楮花 紙まき草楮ハ製して 紙ふす木なり	緑豆 花色黄心 和名八重	蘭草	蘭草	席草 こまハ琉球 と云同く	

○伽藍の塔  
三重塔。雲  
間塔。峯塔。尾上塔  
○九輪石の塔。洞塔  
 ○輪藏○回廊○方丈  
 ○客殿○厨○眠藏○  
 居士○行人○山伏○  
 輪宝○頸陀○袈裟○  
 ○珠数。百八。思ひの玉  
 ○帽子○花血輪○拂  
 子○印むらぶ○能化  
 ○新化○修行○導師  
 ○喝食○禪叩○看經  
 ○五輪○印塔○素絹



七月夏

五十一



○十徳○頭燈○條懸  
 ○金剛杖○杖杖○喚鍾  
 ○見鐘○鏡鉢○鯨口  
 ○木魚○琮璜○徑惟  
 ○神の米○護義  
 ○座禪○灌頂○  
 ○布施○施餓鬼○功德  
 ○因果○地獄○流轉  
 ○三界○十界○宿業  
 ○常香○燒香○五山  
 ○法問○引導○親念  
 ○悟道○陪堂○齋時

置の木してよ  
 うり下品  
 色より夕立みりへ  
 色あはるまびら  
 一番蒔麻  
 秋を  
 直苧かその葉の  
 出羽最上の産より  
 奈良晒を織るもの  
 白麻蒔麻  
 頃植了故の名  
 夏引の絲  
 麻のこ  
 俗  
 綿の花  
 青鬼燈  
 酸漿  
 青蕃椒  
 俗小南蛮胡椒  
 高麗胡椒  
 秋生を  
 秋  
 蒔豆  
 蒜の根  
 瓜  
 種類甚多  
 夏  
 瓜の皮  
 熟  
 瓜  
 類味少  
 南  
 瓜  
 寛文の頃  
 南蛮より  
 南京瓜  
 南瓜と同  
 種類  
 阿古陀瓜  
 形ち南京の  
 瓜  
 揚州鬼原  
 郡田辺村  
 銀  
 瓜  
 揚州鬼原  
 郡田辺村  
 青  
 瓜  
 是西瓜なり  
 増山の井

○奉湯○廻向○彼岸  
 ○命日○迎雲○紫雲  
 ○位牌○六造○菩提  
 ○持戒○破○外道  
 ○鷲の山○峯○宮戸  
 ○開伽○三の車○火  
 ○宅○禁足○諸佛名○  
 菩薩名○祖師名○夏  
 花  
 ○夏中○夏まき○夏  
 花  
 ○花つむ○夏経○夏  
 天盖○賓頭盧○三具  
 足○華慢○九品の臺  
 非釋教の詞

甜瓜  
 濃州本巢郡真桑村  
 瓜の皮  
 熟  
 瓜  
 類味少  
 南  
 瓜  
 寛文の頃  
 南蛮より  
 南京瓜  
 南瓜と同  
 種類  
 阿古陀瓜  
 形ち南京の  
 瓜  
 揚州鬼原  
 郡田辺村  
 銀  
 瓜  
 揚州鬼原  
 郡田辺村  
 青  
 瓜  
 是西瓜なり  
 増山の井



鍾。高野山。愛宕。日枝山。煩惱。坊主。落。  
らんのかちまらわの酒を  
があらうを解まなす

○無常の詞

塩干山。あ。野。鳥。辺野の畑。茶毘場。大。場。だびの畑。無常。の畑。死出の山。死出の。ゆめ。み川せ川。死人。あぬ。三河川。死。酒。棺。酒。

ひろはぶら  
瓜をふ但蔓  
花をふふふ

履を納まげ  
花をふふふ

塩漬みりて食ふ  
大小二種あり

製以  
納豆製醬油製醬油つく

夏切茶  
月の宇治の茶人新茶を壺ふりて  
人ふおくるなり是を夏切茶といふ

麻地酒  
豊後の国  
の製り

乾飯  
楠なり奥州仙臺れはび河州  
道明寺ふ出るしの佳たり

葛水  
砂糖水

冷水賣振舞水  
心太

正字ハ  
石花菜

瀧鱈  
せこー鱈

小児の頭  
霍乱

汗疣  
熱拂瘡

○野送り。灰よせ。墓。中陰。四十九の餅。鬼むさひ。枕食。自殺。白骨。冥途。黄泉。幽霊。七鬼。骸。枕。辞世。

夏 瘦壅塔富士の農男  
富士ふて六七  
月ごろ段々

雪の消え残り  
雪のきえのころごとあまを農男といふ此  
残雪見ゆる年ハ

夏の別  
夏深き。夏後了  
夏に限。夏の果

秋小隣る  
秋を待  
来ぬ秋。秋近き



繪入  
俳諧

季寄手引草卷之上了

